

イギリスにおける中国式庭園との文化交流に関する研究

—ウィリアム・チェンバーズと王立キュー植物園を例に—

160358 鈴木 秀和

序章

今日のイギリスの代表的な文化の一つとして、庭園文化が挙げられる。イギリスの各都市部や大学などの研究機関には植物園があり、都市部から離れた郊外にあるカントリー・ハウスと呼ばれるかつての貴族の邸宅には、広大な庭園を持つものもある。また遠く離れた中国でも、庭園文化は伝統的な文化として位置づけられており、中国全土に渡って私家園林や皇家園林など多種多様な庭園が存在する。筆者がイギリスと中国を海外フィールドワークやゼミ合宿として訪れた際にも、両国ではこれまでに数多くの庭園が造られ、その多くが文化的遺産として現存していることを確認できた。さらに、同じ「庭園文化」ではあるものの、庭園の構造や庭園内の建築物の様式などはイギリスと中国で相違点が多く見られると感じた。

本論文は、17世紀後半のヨーロッパで広く流行したシノワズリと呼ばれる中国趣味の影響を受けて、イギリス人が多くの相違点がある中国の庭園文化に興味・関心を持ったために文化交流が起き、特徴的な庭園文化ができたことを明らかにすることが目的である。そのため、イギリスと中国双方の庭園や建築及び東西文化交流に関する先行研究、造園家による著作物の作品分析を通して、これを証明したい。

本研究では、大英帝国時代の植民地からの植物を多く所有・栽培しており、イギリス本国と植民地の植物園ネットワークの中心的立場を担っていたロンドンの王立キュー植物園(The Royal Botanic Gardens, Kew)に焦点を当て、この植物園と中国との関わりを中心に論じる。王立キュー植物園は、ロンドン南西部のテムズ川沿いにある広大な王立植物園であり、2003年にユネスコ世界文化遺産に登録されている。この植物園は、1759年にイギリス王室の宮殿に併設された庭園に起源を持ち、大英帝国による植民地支配の時代には植民地や直轄地となったインド及び中国をはじめとする世界中の国々から種子や植物の標本が持ち込まれ、その研究が盛んに行われた。また、その他中国式のPagodaと呼ばれる建築物も現存するなど、かつての面影を今に伝えている。この造園や建築を担当したイギリス人建築家ウィリアム・チェンバーズ(Sir William Chambers, 1723-96)は、イギリス式の庭園様式とは大きく異なる中国式庭園の特徴の中で、どのような点に魅力を感じ、イギリスの庭園である王立キュー植物園に中国式庭園の要素をどのように導入したのかについて論じ、またその意図について探りたい。さらに、当時のイギリスと中国の庭園文化交流がその後のイギリス及びフランスやドイツといったヨーロッパ諸国にどのような影響を与えたのかについても明らかにする。

第 1 章では、イギリス庭園文化と中国庭園文化の特徴の整理として、それぞれイギリス式庭園の成立過程や特徴をロウシャムの庭 (Rousham House & Gardens) やオックスフォードのブレナム宮殿 (Blenheim Palace) の庭園を例に、中国式庭園の同項目を北京の頤和園 (いわえん) を例に論じる。また、時代背景の整理として 17 世紀後半からのイギリスにおける中国趣味について触れ、イギリス人が中国の庭園をどのように見ていたのかについて論じる。

第 2 章では、王立キュー植物園の歴史、ウィリアム・チェンバーズの生い立ちについて整理した後、チェンバーズが王立キュー植物園に中国式庭園の要素をどのように導入したのかについて、著書や庭園建築の設計図及びスケッチを用いて考察する。さらに、彼が中国式庭園要素を導入した意図についても推察する。

第 3 章では、チェンバーズによって中国要素が導入された王立キュー植物園が現代のイギリス社会においてどのような役割を担っているのかについて考察する。また、イギリス及び他のヨーロッパ諸国において彼の影響を受けて中国式庭園要素が導入された庭園はあるのかについて検証することで、この庭園様式の影響力の大きさについて明らかにする。

第1章 イギリス庭園文化と中国庭園文化、及び中国趣味について

本章では、イギリスと中国それぞれの庭園文化の特徴と成立過程について論じる。「庭園」という言葉は同じでも、ヨーロッパとアジアでは庭園の様式やその背景にある自然観や風景観が大きく異なる。はじめに、イギリスの庭園文化の特徴と成立過程を、ウィリアム・ケント (William Kent, 1685-1748) の手掛けたロウシャムの庭やランスロット・ブラウン (Lancelot Brown, 1716-83) の手掛けたオックスフォードのブレナム宮殿の例を用いながら、イギリス式庭園の特徴がどのように造園されているのかを確認する。続いて、同様に中国式庭園の特徴を北京の頤和園などの例を用いながら考察する。最後に、17世紀からの中国趣味について、時代背景を整理するとともに、また当時のイギリス人が中国の庭園をどのように見ていたのかについて論じる。

第1節 イギリス庭園文化について

本節では、イギリス庭園文化がどのような過程を経て成立したのか、またどのような特徴があるのかについて論じる。まずイギリス式庭園の成立過程として、その源流となる古代文明における庭園からヨーロッパ大陸のイタリアやフランスの庭園の特徴について確認し、続いてイギリスの庭園がどのような特徴を持っているのかについて考察する。また、これらの特徴が具体的にどのように実際の庭園で再現されているのかを明らかにする。

イギリス庭園文化の源流は古代エジプト及び古代オリエントに遡る。古代エジプトの庭園は、方形の池や列のように並んだ木々、四阿 (あずまや) などが左右対称に並ぶ整形庭園であり、また古代オリエントの庭園は庭の部分と狩猟のための自然林で構成されたかなり大規模な庭園であった。いずれも、古代の王家にとっての「楽園」をイメージして造られたものであると考えられる。しかし、中世になるとヨーロッパ各地の修道院や城砦に小さな整形庭園が造られるのみで、大規模な庭園は発展しなかった。

その後、15世紀後期になるとイタリアでルネサンス庭園がフィレンツェ郊外などで発展する。このルネサンス庭園は、郊外に余暇を健康的に過ごすために比較的小規模に造られたものだが、後にローマにあるヴァチカン宮殿のような広大な整形庭園 (参考資料1) が造られるようになっていった。このフィレンツェやローマで造られたイタリア式庭園の特徴について、ヨーロッパ文化学者の岩切 (2008) は、整形庭園であることに加えて、噴泉、彫像、トピアリ (装飾刈り込み)、花、ハーブ、果樹、樹木、灌木、さらに苑亭、柱廊、グロット (庭園洞窟) などが挙げられると論じている。建築家のズイレン (1999) もまた、イタリア式庭園の建築物の重要性について言及し、植物は通路に沿って配置されると論じていることから、この時期から庭園における人工性が高くなったと考えられる。また、それまでは人間は自然を支配することはできないとされていたが、ルネサンス期においてこの思想が逆転することになったとも考えられる。

ルネサンス期のイタリアにおける造園と思想転換の動きがフランスでも同様に起こり、多くのフランス人建築家がイタリアで造園方法を学び、王宮や多くの城砦にフランス式庭

園が造られるようになった。代表的な庭園としては、17世紀にルイ14世が庭師アンドレ・ル・ノートルとともに造ったヴェルサイユ宮殿の庭が挙げられる。ノートルはヴォー・ル・ヴィコントの庭園を建築家と画家との合作で成功させ、ルイ14世や多くの貴族に認められるようになった。彼の手掛けたヴェルサイユ宮殿 (Château de Versailles) の庭園 (参考資料2) は、東西南北に走る主軸を持つことや、もとの土地には高低差が30メートルもあったことから、階段状の花壇や生垣、緑の四阿といったものが多く造られた。この技法を、ズイレン (1999) が「植物の建築物」(75) と表現していることから、このフランス式庭園には、人間の手によって自然を規制するという概念が存在することが読み取れる。このフランス式庭園はイタリア式庭園にならった整形庭園であるため、左右対称であることや幾何学模様の多用、城を起点とする眺望点の位置などが類似点であり、それは平面図 (参考資料3) から読み取ることができる。しかし、フランス式庭園は、パルテールと呼ばれるハーブや花などを使って模様を表したものや、運河が独自の特徴であり、ヴェルサイユ宮殿にも多く導入された。左右対称と階層性を重視するイタリア式の整形庭園は、フランスで完成したと言っても過言ではないだろう。

イタリアやフランスなどのヨーロッパ大陸で発展した整形庭園は17世紀にイギリスへ伝播した。しかしイギリスにおいて整形庭園はあまり定着せず、むしろそれに対抗する形としてイギリス式風景庭園という独自の庭園が誕生した。岩切 (2008) はイギリス式風景庭園について、自然の地形を活かし、起伏する芝生と湖、点在する樹木からなり、古典様式の神殿などが点景物として添えられていることが特徴であると述べている。幾何学的に構成されるフランス式庭園とは異なり、非整形な曲線が多用され、自然の風景のような庭園であることが整形庭園との大きな違いだろう。建築学者の田路 (2000) は、この風景庭園は風景画としてイギリスに伝わった古代ローマの古典の風景を庭園の中に表現しようとしたと論じている。そのため、これらのイギリス式風景庭園の特徴は、風景画から来ている可能性が非常に高いと言える。しかし風景画だけではないとも考えられる。18世紀のイギリス人貴族は、古典の風景画や文学、詩に親しみ、その中に出てくる理想の風景を自身の庭園で楽しみたいという想いがあったのではなかろうか。また、そのような思想は自然や景観に関するイギリス人思想家独自の言論に大きな影響を受けてできたものであると考えられる。イギリスでは18世紀に風景庭園が誕生する以前から、園芸愛好家でもあったフランシス・ベーコンの「庭園について」(『随想集』1625所収)、エデンの園について言及したミルトンの『楽園喪失』(1667) や啓蒙思想家シャフツベリの論集『人々、習慣、意見、時勢の特徴』(1711) など、自然の風景のように美しい庭園や景観についての言論が盛んになされていた。これらの言論に共通するのは、自然は偉大であり、かつ壮麗で美しいということである。庭園を所有する貴族の他、建築家、造園家がそのような本や言論に親しみ、共感したからこそ、実際に彼らのもつ庭園においてこれらの言論で述べられた景観を忠実に再現することができたと考えられる。

以上のような背景のもとで造られたイギリス式風景庭園の代表作には、イギリス人風景

画家・造園家のウィリアム・ケントの手掛けたロウシャムの庭園が挙げられる。彼は、馬車装飾の職人や画家として修業をした後に造園に携わるようになった。オックスフォードに近いロウシャムの庭は、「自然は直線を好まない」という彼の言葉通りに伸びやかな自然の風景を表現するために曲線を多用した風景庭園であることはもちろんのこと、古代ローマを想起させるローマ神殿やヴィーナスの彫像といった点景物も配置した庭園である。当時、グランド・ツアーと呼ばれるイタリアをはじめとするヨーロッパ諸国への旅行が流行していたことも相俟って、クロード・ロランの描くノスタルジックな風景画（参考資料 4）はケントを含め多くのイギリス人が憧れを抱いていた。ケントは、そのようなローマ近郊やギリシャの風景を多く描いたロランの風景を理想的な自然として、造園をする上でモデルにしたとも考えられる。

また、オックスフォードのブレナム宮殿もイギリス式風景庭園の代表的な作品である。邸館の周りには造園家ランスロット・ブラウンによって造られた広大な風景庭園が広がっている（参考資料 5）。彼は庭師として修業を積んだのち、ストウ庭園にてケントの下で働いたが、同じ風景庭園であっても、ブラウンの造る風景庭園はケントのそれとはやや異なっていた。ブラウンはブレナム宮殿において、邸館付近の地形を活かして、多くの人々を動員した土木工事によって蛇行曲線を用いた人工の湖を造った。ブレナム宮殿の平面図（参考資料 6）を見ると、邸館前に広がる湖の輪郭が曲線であることや、その周りの蛇行した遊歩道が見てとれる。湖の周りの広大な芝生には樹木を美的に、かつ不規則に配置するだけでなく、さらに芝生には羊や牛などを放牧させていた。人工で造られた庭園であるにも関わらず、ブラウンはあたかもそこに自然の風景が存在しているかのような景色になるよう造園したと考えられる。実際に筆者が海外フィールドワークでこのブレナム宮殿の庭園を訪れた際も、人工で計画的に造られた庭園とは思えないほどのどかな自然風景に近い景色が邸館前に広がっており、広大な自然の美しさを感じ取ることができた。岩切（2008）は、ブラウンはイギリスのその土地から景観美を採すだけでなく、イギリスの農牧の風景も同時に再現させることに注力したとして、「イギリス貴族の所有する土地と風景の美的造形」（170）と評価する。英文学者の中尾（1999）も、ブラウンの造り上げた風景は、イギリスでも比較的気候の穏やかなイングランド固有の風景をモデルとしたと論じている。このように、ロラン描くイタリアなどの異国の自然風景ではなく、イギリス国内の風景をモデルにしたことから、ブラウンによってイギリス式風景庭園が確立したと考えられる。

以上のイギリス庭園文化の成立過程及び 2 つの風景庭園の例から、イギリス式風景庭園は古代から続くヨーロッパの庭園の中で唯一非整形庭園であることがわかる。また人工であるにも関わらず、風景画やイギリスの風景をモチーフにして、自然風景にできるだけ近い庭園を造るという点はイギリス庭園文化の大きな特徴であり、独自性があると評価できる。19 世紀、20 世紀になると、イギリスの庭園は都市化によって縮小したり、また貴族のみの文化ではなく大衆化したりと多様化していくが、風景庭園で重視された自然に対する考え方や、曲線美といった基本的な風景庭園の特徴は現代のイギリス庭園の起源にもなっている。

る。

本節では、ヨーロッパ庭園文化の源流とされる古代ギリシャの庭園、そこから派生したイタリア式庭園やフランス式庭園の特徴を整理したのち、イギリス独自の庭園様式はどのような特徴を持っているのかについて明らかにした。イギリス式庭園は、自然風景やその景色を描いた風景画に高い興味関心を示すイギリス人の自然に対する価値観のもとで造られ、現存する風景庭園に見られるように、自然性を非常に重視して人工性を極力排除した庭園であるとまとめることができる。また、そのようなイギリス式風景庭園とよばれるイギリス独自の庭園は、ケントやブラウンといった造園家によって、実際に曲線を多用したり、極力自然の風景に近づけたりするなどして造園されたと考えられる。

第2節 中国式庭園文化について

本節では、中国式庭園の成立過程について整理した後、中国式庭園の代表作である北京の頤和園（いわえん）の例を用いながら、その特徴や構成要素についてどのようなものが挙げられるのかについて論じる。さらに、前節で触れたイギリス式庭園の特徴と比較し、イギリス式風景庭園と中国式庭園における共通点や相違点について考察する。

中国式庭園成立の起源は、漢王朝時代（紀元前 206-220 年）に遡り、この庭園様式は世界で最も古い庭園体系の一つとされている。当時の皇帝、国王の多くは狩猟を趣味にしていたため、その狩猟の舞台となる山や森をシンボルとして造ることを目的に、皇帝個人の庭園が造られていた。しかし、全盛期を迎えた隋（581-618 年）及び唐代（618-907 年）から庭園は皇帝個人のものでなくなり、政府高官や詩人、風景画家にも広まり、中国全土に渡って多くの庭園が造園され、水路や築山を配した山水庭園と呼ばれる庭園様式が完成した。宋代（960-1279 年）は庭園の人气がさらに高まったこともあり、庶民にも広く庭園が知られるようになった。この頃、建造物のデザインが繊細かつ南方風になったのは、1127 年以降の南宋の首都が臨安（現在の杭州）にあったからとも考えられる。その後、中国式庭園は明（1368-1644 年）及び清代（1644-1912 年）に成熟期を迎えた。この頃、陶器や絵画など多くの芸術作品に庭園や自然風景が描かれるようになるなど、庭園と芸術との融合が図られるようになった。また、それらの作品は中国国内だけではなく、芸術作品の貿易などを通して日本やヨーロッパへも渡ったことで、中国式庭園が広く世界へ知られることになった。

では、中国式庭園にはどのような特徴が挙げられるのだろうか。イギリス式風景庭園やフランス式整形庭園と大きく異なる特徴は三つ挙げられる。一つ目は庭園を造る上で自然観や風景観の基盤となる哲学及び思想である。中国の庭園は古くから伝わる伝統的な哲学的思想に基づいて造られている。例えば造園学者の馬・武（2003）の論じる「天人合一」（99）の理念である。ここでは「天」とは自然のことであり、「人」は人間のことを指すと考えられる。つまり、自然と人間の交わる場所としての庭園を理想の姿として掲げているのだ。また、この「天人合一」の理念の他、儒教で重要視される「道」の他、「仁」「義」「礼」「智」「信」などの道徳的要素も造園においては重要視され、庭園を設計する上での方角や建築物

を配置する場所を決める際に用いられる。

二つ目は庭園内の建築物であるが、中国式庭園では植物や水、石などの自然要素だけではなく庭園内に配置される建築物も重要な役割を担っている。建築学者の仙田ら（2001）によると、自然要素に加え、庁、堂、軒、亭、廊など多様な建築群を配することにより空間構成をなす、回遊式庭園であることが中国式庭園の前提条件であるという。庁・堂は庭園生活の主となる建築物、軒は書画や茶を嗜む場所、亭は庭園鑑賞の際に小休憩をとる場所、廊は諸施設との連絡及び鑑賞の導線の役割をもつ建築物というように、それぞれが機能を持ち、計画的に庭園内に配置されている。また造園学者の河原（2007）は、庭園建築による高密度な景観構成も中国式庭園の特徴であると指摘する。中国式庭園の平面図（参考資料 6）を見ると、庭園内には多くの建築物が配置されており、フランス式庭園やイギリス式風景庭園と比較すると、庭園建築の重要性が見て取れる。中国では、庭園は鑑賞されるものという役割だけではなく、日常の居住生活と密接な関係を持ち、それぞれの役割を担っているため、様々な建築物及び工作物や景観が複雑に組み合わさるように造られている。

三つ目は、中国式庭園では四季の風景を庭園の植物などで表現することが求められることである。馬・武（2003）は、清代の呉子の著した『花鏡・自序』を用い、中国の伝統的な庭園における四季の造形の重要性を指摘している。これは植物本来のもつ生物学的な特徴を活かしたものであり、春は桃の花と霞、夏は蓮と雲、秋は桂の紅葉と風、冬は梅の花と雪、というように四季折々の風景が庭園内で表現されるように造園することを指す。実際に中国式庭園を訪れると、その四季に合わせて見頃の花が開花しており、どの季節に庭園を訪れてもその季節に合った花や植物を風景とともに鑑賞することができるようになっている。このことから、中国式庭園は古くから伝わる季節感に基づき、春夏秋冬それぞれの風景を庭園内に造りだすことも特徴であると考えられる。

次に、以上で述べた景観構成や建築物などの中国式庭園の特徴が具体的に実際の庭園でどのように造られているかについて、北京にある頤和園（参考資料 8）を例に検証する。頤和園は首都北京の北西部に位置する敷地全体の面積が約 290 万 m²にも及ぶ皇家園林であり、1998 年にユネスコ世界文化遺産に登録された。頤和園は、清代の 1750 年に当時の皇帝である乾隆帝（1711-99）が造園した清漪園（せいいえん）がはじまりである。清漪園は 1860 年のアヘン戦争においてイギリスとフランスの連合軍によって焼失してしまったものの、光緒帝によって再建され、頤和園と改称された後に西太后の避暑地として利用されていた。

頤和園の敷地の 4 分の 3 を占める昆明湖や万寿山は、景勝地である江南の風景を模したとされている。造園学者の祝ら（2006）によると、乾隆帝は 6 度に渡り江南を巡幸し、その際に宮廷画家に描かせた風景を基に清漪園を造園させたため、江南の風景を忠実に再現させたと論じている。実際に、江南の孤山や西湖は現在の頤和園の万寿山及び昆明湖に対応しており、さらに両方とも一池三山を理想の風景とする神仙蓬莱思想に一致している。以上により、乾隆帝はこの江南を頻繁に訪れており、この地の風景と神仙蓬莱思想における理想の風景を自身の庭園にも再現したかったと考えられる。仙田（2001）の論じる中国式庭園

の要素である水、石と多様な建築物で構成される回遊式庭園であること、また河原（2007）が論じている庭園建築と日常生活との密接な関係があることは、頤和園の庭園内に存在する昆明湖と、その周りに点在する佛香閣や玉帯橋（参考資料 9）、秋水堂、福萌軒、長廊（参考資料 10）などの数多くの建造物から、頤和園ではこれらの中国式庭園の特徴が顕著に見られることが分かる。

以上の中国式庭園の要素はイギリス式風景庭園とどのような共通点があり、どのような相違点があるのだろうか。まず共通点であるが、大きく二点ある。一つ目は、両者ともに回遊式庭園の側面を持っていることである。先述の通り、中国式庭園では湖や池の周りに設置されている回廊から風景を鑑賞するようになっており、またイギリス式風景庭園においても、中国式庭園に見られるような回廊はないものの、オックスフォードのブレナム宮殿のように湖の周りの湾曲した遊歩道を歩いて鑑賞する構造になっている。

続いて二つ目の共通点は、人工であたかも自然に近い風景を造り出すことである。中国式庭園の頤和園にある昆明湖や万寿山も人工で造られたものであり、イギリス式風景庭園のブレナム宮殿も、宮殿近くの川から水を引いて中央の湖を造ったとされているなど、多くの人の手によってそれらの自然景観に近い風景が造られたことは共通点である。庭園の地図などを見ても（参考資料 3. 6. 11）、フランス式庭園は直線が多く用いられているのに対して、中国式庭園やイギリス式風景庭園において直線は用いられておらず、曲線が多く用いられている。このような曲線の使用も、いかに自然に近づけるかという工夫の表れでもであると考えられる。イギリス式庭園と中国式庭園の起源は異なっているにも関わらず、このような共通点が見られることは、自然や風景に対する考え方や価値観が似ていると言える。そして自然に対する価値観が似ていたことから、後に多くのイギリス人が中国に渡り、その庭園の詳細を記録したり、次章で紹介するウィリアム・チェンバーズのように庭園や建築を学び、それをヨーロッパに持ち帰って伝えたりすることに繋がったのかもしれない。

しかし相違点も二点ある。一つ目はモチーフとなるものの違いである。庭園を造る上でモチーフとなったものは、北京の頤和園の場合は江南の風景及び中国の神仙蓬莱思想であるが、オックスフォードのブレナム宮殿はクロード・ロランの風景画やイギリスの田園風景とされている。中国式庭園のように実際に存在する景勝地の風景と宗教や哲学、道徳の融合によるものか、イギリス式風景庭園のようにイギリスの風景と風景画という芸術作品の融合によるものかという違いがあり、この違いにより庭園を造った際に結果として大きな違いが生じることに繋がると考えられる。

二つ目の相違点は建築物の重要性の違いである。仙田ら（2001）の論じるように、中国式庭園では多種多様な建築物が庭園の各所に配置されており、建築物がかなり重要視されている。それに対してイギリス式風景庭園では、建築物は比較的中央に配置される邸館や湖に架ける橋ほどで、その他の建物は見られない。中国式庭園では、ある建物では庭園の見物を、そしてまた別の建物では景色を見ながら茶を嗜むなど、実際はその建築物ごとに利用目的が異なっていたことがそのような違いが生まれる要因とも考えられる。反対に、イギリス式

風景庭園において建築物が最小限に抑えられているのは、モチーフが風景画から来ているということもあり、景色を構成する重要なものは芝生や木々の緑、湖や池、及び空などの自然要素だからであると考えられる。できる限り人工的なものを排除した上で、自然に近い風景を造り上げるために、中国式庭園とは異なり建築物を少なくしたと考えられる。

以上のように、中国式庭園は古来の思想と現存する景勝地をモチーフに、また四季折々の風景を重視しながら、自然要素のみにとどまらない多くの建築物を組み合わせた回遊式庭園が特徴であることが分かった。そしてその歴史はかなり古く、時代を追うごとに広く国民に愛されるようになり、今日の中国の伝統的な文化の一つとなった。そして、第1節で触れたイギリス式風景庭園とは回遊式庭園であることや自然風景のような庭園を人工で造りあげることなどの共通点もあるが、モチーフの違いや建築物の重要性といった面で相違点もあることも明らかになった。

第3節 イギリスと中国趣味

第1節及び第2節では、イギリスと中国の庭園文化の成立過程とその特徴について明らかにし、実際の庭園でそれらの特徴がどのように表れているかについて検証した。それぞれの庭園の特色は大きく異なるものの、いくつかの共通点があることから、ヨーロッパで流行した中国趣味によって多くのイギリス人が中国の庭園に共感を抱き、興味を持っていたのではないだろうか。そこで本節では、イギリスと中国の庭園の文化交流が起こった17世紀後半から19世紀前半にかけてイギリス国内で流行した中国趣味がどのようなものであったのかについて分析する。また当時中国の庭園がイギリス国内でどのように伝えられていたのかについて明らかにする。

中国趣味は、“Chinoiserie”（シノワズリ）とも呼ばれ、17世紀後半からヨーロッパに輸入された中国の美術作品や、中国や東洋の人物、風景、文様などを用いた工芸作品の総称及びその流行のことである。これらは主に当時のヨーロッパの貴族階級を中心に広く流行した。地域文化学者の鈴木（2014）は、この中国趣味とイギリスの室内家具との関わりについて、名誉革命（1688～89年）から18世紀半ばまでイギリスにおいて中国風塗装が流行したとし、当初は中国の模倣が多かったものの、次第にヨーロッパ的な嗜好に適合し、イギリス社会に浸透していったと論じている。また鈴木によると、イギリスでは中国風塗装を施した家具が多く流通し、多くのイギリス人によって使われただけでなく、18世紀には中国風塗装についての本の出版が盛んに行われ、中国風塗装は教養やたしなみとして広く浸透していたようである。さらに18世紀中頃以降には、イギリスで造られた中国風塗装を施した家具がドイツやスペイン、ポルトガルなどの多くのヨーロッパ諸国へ輸出されていたと鈴木は分析している。実際に、イギリス人家具職人トマス・チップェンデルは *The Gentleman & Cabinet-Maker's Director* (1754) という職人向けの指導書を出版している。デザイン史学者の門田（2015）はこの指導書によって建物や家具に組格子や花鳥、風景といった装飾及び浮彫といった図案が様式的に伝えられたことを明らかにすると同時に、こ

の本が出版されて以降、中国風の装飾が施された家具の大量生産とカタログを用いた販売が行われていったと論じている。このことから、イギリス国内で中国風塗装はかなり普及していた可能性が高いと考えられ、イギリスでは中国趣味がかなり流行していたと推察される。

中国趣味がヨーロッパやイギリスで流行した当時、中国や東洋に対するイメージはどのようなものであったのだろうか。英文学者の日下（2018）は、歴史学者 D.F.ラックの論文「中国像の変容」を引用し、16世紀から中国で布教活動をおこなっていたカトリックのイエズス会宣教師によって伝えられる情報によってシノロジー（sinology）と呼ばれる中国概念が形成されていったと分析している。具体的な中国概念については、ヨーロッパ文学者の大野（2011）がまとめている。彼によると、イエズス会士たちは、キリスト教が広く普及していたヨーロッパの人々が重視する「神」に対応するものが中国に存在しないことから、中国を理解不能な神を持たぬ虚無の世界であると捉えていたのではないかと論じている。実際に中国では孔子の唱えた儒教の教えが広く浸透しており、また君主制国家をとっていた時代には皇帝が絶対であったために、中国の人々は儒教における「天」もしくは実在した皇帝をキリスト教界における「神」のような存在として崇めていた。以上のことから、キリスト教世界であるヨーロッパの人々は、儒教が中心になっていた中国の「異質さ」に大変興味を持っていたと言える。ヨーロッパにはないこの「異質さ」こそが、ヨーロッパの人々の興味をとらえ、芸術としての価値を認めていったのだろう。

しかし、ヨーロッパ人の中国に対するイメージは好感だけではなかった。日下（2018）は、イギリス人哲学者であり経済思想家でもあるジョン・スチュワート・ミルの『自由論』を用いて次のような論を展開している。日下は「古い時代には優れた才能と知恵に恵まれた最も進んだ制度と慣習を誇った中国であれば世界を牽引する役割を担ってよいはずだった。だが実際は何千年もの間、停滞してしまった」（87）、と論じている。ヨーロッパの人々の中でも、中国の社会や宗教及び芸術の価値を認めている人もいた一方で、それを酷評した上で中国よりもヨーロッパの社会の優位性を唱えた人もいたと考えられる。

では、室内装飾や家具だけではなく、屋外にある庭園と中国趣味はどのような繋がりがあったのだろうか。文化人類学者の片平（2010）が中国趣味について、次第に後期バロック様式やロココ様式などとも融合し、建築や庭園など広く諸芸術にみられる様式となっていたと論じていることから、中国趣味は室内装飾だけではなく、屋外の建築や庭園にも広く取り入れられていったと考えられる。また、ヨーロッパ文学者の勝山（2006）によると、中国の美学はヨーロッパの庭園スタイル、建築、装飾美術において広範な影響を与えたと論じ、中国趣味が庭園や建築にも及んでいたと主張している。彼女によると、そこに関わった人物としてイギリス人外交官ウィリアム・テンプレート（Sir William Temple, 1628-99）、詩人のジョゼフ・アディソン（Joseph Addison, 1672-1719）、ホレス・ウォルポール（Horace Walpole, 1717-97）、そしてオリバー・ゴールドスミス（Oliver Goldsmith, 1728-74）の4人が挙げられるとしている。そのうち、特にテンプレート、アディソン、ゴールドスミスの3人の人物に

について、彼らの著書の中で中国の庭園や建築がどのようにイギリスを含むヨーロッパに伝えられたのかについて以下では考察していく。

まず、テンプルは著書の *Upon the Gardens of Epicurus* (1685) で、中国人とヨーロッパ人の美的感覚の違いについて触れた上で sharawadgi (シャラワジ) という植樹の方法について紹介している。彼のこの著書によって、イギリス国内に中国の庭園の特徴やその評価が伝わったと考えられる。この「シャラワジ」という言葉について、歴史学者の Liu (2008) は、実際にある中国語の言葉ではなくペルシャ語が変化したもの、また日本語の sorowaji という単語からきていると論じている。また、東西交渉史学者の Shimada (1997) は、この sharawadgi という言葉は、日本語の sorowaji (揃わじ) という言葉、もしくは sawaraji (触らじ) という言葉からきているのではないかと論じている。Shimada の提示するどちらの言葉も中国の庭園で植物を不規則に、またできる限り人間の手を加えずに自然のままにしておくことを表すものである。このことから、テンプルは sharawadgi を用いて、非対称に、また自然にできるだけ近い風景を造園することが中国の造園の特徴だと主張したと考えられる。

次に、アディソンは中国の庭園をどのように捉えていたのだろうか。ヨーロッパ文化学者の加藤 (2015) によると、アディソンの定期刊行物 *The Spectator* の中に、同じ並べ方で均一の形に木々を植えるのであれば誰でもできるという理由で中国人がヨーロッパの整形庭園を軽蔑しているとの記載があることから、アディソンはフランスやイタリアの整形庭園の規則性について批判したのではないかと論じている。アディソンはまた、この定期刊行物 *The Spectator* において、“they [Chinese] express the particular Beauty of a Plantation that thus strikes the Imagination at first Sight” (n.pag.) と中国の庭における植栽の美しさについて高く評価していることから、アディソンはフランスやイタリアの整形庭園における規則性に則った植栽よりも、中国の庭園における不規則な植栽のある風景を美しいと感じていたと言える。

最後に、ゴールドスミスはイギリス人の中国趣味による中国庭園の模倣が起こっていたことを彼自身の著作の中で明らかにした。実際に、中国からの来訪者による英国探訪記である *Letters from a Citizen of the World* (1762) において、イギリスの庭の印象についての記述をしている。Goldsmith (1762/1820) によると、それは「英国人は庭園術に関し中国人と同じ完成度に至っていないが、最近彼らの模倣をするようになった」(166)と記している。またイギリスでは既にこの時期に中国趣味による中国式庭園の模倣の動きが起こっていることを示した上で、さらに中国の庭園の良さについては、「樹木はこの上ない豊かさで伸びるに任せてある。川も…(中略)…自然に曲がりくねっている。」(166)と紹介している。中国趣味によってイギリス人たちは中国の庭園を模倣するようになり、人工ではあるものの自然な風景を再現しようとしたが、中国の庭園の詳細と比較すると、イギリスの庭園は未熟なものである、というのがゴールドスミスのイギリスの庭園に対する意見ではないかと考えられる。

以上のことから、17世紀後半頃からイギリス国内に中国の庭園の様子が伝えられ、不規則や非対称を基本とする中国の造園が多くのイギリス人に受け入れられていったことが分かる。ブラウンによるイギリス式風景庭園も中国の庭園と同じように非対称であり、かつ曲線を多く用いることはあるが、庭園内の木々の植え方や生やし方に関しては、無秩序に植えたり伸ばしたりする「異質さ」にイギリス人は興味を持っていた。イギリス人がこの中国の「異質さ」に興味を持ったという点では、他の芸術作品にみられる中国趣味の背景にあるものと同じであること推察される。

しかし、テンプルやアディソン、ゴールドスミスの記述では「外見としての中国の庭」しか明らかになっていない点に注目したい。特に、アディソンやゴールドスミスは中国の庭について、木々の植え方や生やし方などの見かけ上の造園については記述してはいるものの、その造園の背景にある中国人の庭に対する価値観や自然観、及び中国式庭園の特徴である建築物の役割や四季の情景については紹介することはできなかった。実際に彼らが中国の庭園を訪れることができなかったことや、中国の現地で造園や建築について深く学ぶことができなかったことが原因であると考えられる。テンプルも中国人の美的感覚について触れることができたものの、それはごくわずかなものでしかなかった。

本節では、ヨーロッパで流行した中国趣味が家具や陶磁器などの室内装飾だけではなく、庭園や建築の分野にまで広く見られることが明らかになった。しかし中国の庭園については、4人のイギリス人がその詳細を記録してその価値を伝えたものの、それは見かけ上の造園について紹介することができたのみであった。しかし、不規則な植栽などの中国式庭園の特徴を多くのイギリス人に伝えることができたという点では、後のウィリアム・チェンバーズにも影響を与えたことが推察される。

本章では、イギリス庭園文化及び中国庭園文化の成立過程や特徴を整理し、ブレナム宮殿や頤和園といった代表的な庭園を例にその特徴を確認することで、双方の共通点と相違点を明らかにした。イギリス風景庭園はイタリアやフランスの整形庭園とは大きく異なり、曲線が多用され、人工でイギリスの田園風景のような自然の風景を再現することが特徴である。また中国式庭園は伝統的な思想や哲学の下、江南などの現存する景勝地をモチーフに、建築物と自然を調和させることはもちろんのこと、四季折々の情景を庭園内に表現するという特徴を持つ。また、17世紀後半以降にヨーロッパで流行した中国趣味と庭園に関して、イギリス人は当時イギリスに持ち込まれたフランス式やイタリア式の整形庭園には見られない中国式庭園の自然の不規則性に注目していたことが明らかになった。

第2章 王立キュー植物園における中国式庭園要素の導入について

本章では、ロンドンにある王立キュー植物園の歴史や特色、イギリス人建築家ウィリアム・チェンバーズの生い立ちについて整理した後、チェンバーズが王立キュー植物園に中国式庭園の要素をどのように導入したのかについて考察する。はじめに王立キュー植物園の歴史について触れた後、チェンバーズによる建築学的な東洋との繋がりができる同時期に、植物を通じた東洋との繋がりがあったかどうかを検証する。続いてウィリアム・チェンバーズについて、彼の生い立ちや中国での建築についての研究、さらに彼から見た中国の庭園はどのようなものであったのかについて、彼の著書から分析をする。さらに、チェンバーズの *A Dissertation on Oriental Gardening* (1772) の中で論じている中国要素がキュー植物園内にいかに導入されたかを検証し、最後にその導入の意図を推察する。

第1節 王立キュー植物園について

本節では、ウィリアム・チェンバーズが中国式庭園の要素をイギリス式庭園に導入を試みた王立キュー植物園について、その歴史と成立過程を論じた上で、王立キュー植物園が中国をはじめとする東洋とどのような関わりを持っていたかについて考察する。特に、チェンバーズによる中国との建築学的な繋がりができる同時期に、植物を通じた東洋との繋がりがあったのかについてプラントハンターの活躍という視点から検証する。

王立キュー植物園はロンドンの中心から南西に約 12km 離れたテムズ川沿いに位置する広大な王立植物園である。現在、植物園は 132 ヘクタールもあるイギリス国内最大の規模を誇り、コロナブックス編集部 (2019) の王立キュー植物園のガイドブックによると、園内にある 3 万種類以上の植物と約 1 万 4000 本の樹木は世界最大の植物コレクションとも言われるようである。また、260 年間に渡って集められた約 700 万点もの植物標本は、植物研究において大きな役割を担っていると言える。園内には Palm House (参考資料 12) をはじめとする巨大な温室の他、ロック・ガーデン (参考資料 13) やバラ園、日本庭園 (参考資料 14)、中国風建築などが点在する。

王立キュー植物園の歴史は、13 世紀に遡る。当時現在の王立キュー植物園のある地域一帯はロンドン郊外の広大な緑地であり、エドワード 1 世が王宮を、そしてその後はヘンリー 1 世がリッチモンド宮殿を建ててそこに住んでおり、庭園の造園も行っていった。その後、17 世紀後期に植物愛好家であるヘンリー・ケーペル男爵がリッチモンド宮殿に近いキューの地に果樹園を造った。これにより、キューでは農業が盛んに行われるようになる。18 世紀に入ると、ジョージ 2 世がキューの地に隣接する地にリッチモンド・パークと呼ばれる狩猟用の庭を造り、同時に彼の妃であるキャロラインはここに王室庭園を造園し、王立植物園としての基礎を築いた。また、ジョージ 2 世の皇太子フレデリック・ルイスの妃であるオーガスタ妃がこの王立庭園を拡張し、世界中からの植物の栽培をする植物園に発展させた。ウィリアム・チェンバーズが園内に中国風の Great Pagoda (以下、Pagoda と記載、参考資料 15) や Orangery を建築したのもこの時である。その後はリッチモンドとキューにあつ

た2つの庭園が一つのキュー・パークと呼ばれる公園にまとめられ、18世紀後半には王立協会の会長でもあったジョセフ・バンクスが庭園の監督を務め、植物標本の収集や植物画の収集を積極的に行うようになった。さらに、その後のヴィクトリア朝時代には大英帝国による植民地支配と戦略的な植物資源の探索として世界中から多くの植物標本等が持ち込まれ、また世界各地にある植物園や個人が所有する標本をも大量に購入したことで、世界最大規模の植物コレクションを有する植物園と言われるに至っている。

王立キュー植物園は2003年にユネスコ世界文化遺産に登録された。このユネスコの登録は、建築学的な側面と植物学的な側面の双方において評価されたと考えられる。地理学者の野間(2014)は、キュー植物園がユネスコから評価された事由について、18世紀以来のキュー植物園の植物学の分野における収集物の豊富さとヨーロッパと遠方地域の影響を大きく受けた公園風景と建築、また生物学や生態学をはじめとする科学分野の発展への貢献、著名な建築家らによる風景庭園と壮大な建築物であると分析している。このことから、この植物園が世界中の植物学の中心的立場をとっていること、また建築学的にも非常に価値のある植物園であるということが考えられ、両側面から非常に価値の高い植物園であることがわかる。現在では、植物学的及び建築学的の両側面を持ち合わせていると考えられるものの、イギリス国内で建築や庭園分野における中国趣味が流行していた当時、この植物園は植物学的な側面で東洋との繋がりを持っていたことを論証したい。

18世紀にキュー植物園に多くの植物種が集められたのは、プラントハンターと呼ばれる人たちの功績が大きいと考えられる。野間(2014)によると、キュー植物園にはプラントハンターと呼ばれる人々によって書かれた多くの往復書簡や記録が集められていると紹介している。実際に、キュー植物園は計3回に渡ってプラントハンターを派遣しており、多くの植物の資料を持ち帰ってきたと考えられる。プラントハンターとは、野間(2009)は造園学者である白幡洋三郎の説を用いて、「未知の生物を生きのまま、種子で採取したり、精密な絵を描いたり、標本で記録したりする探検的要素をもったプロフェッショナルである。しかし、学歴、出自からは決してエリートではない人が多い。多くは園芸家、庭師、農家の息子などである」(111)と定義している。また彼は、このプラントハンターは2種類に分けられると提唱している。一つ目は「熱帯植物・経済植物採取(食糧・薬草利用)型」(113)であり、熱帯に生息する希少な植物種を採取し、そこで繁殖させ、品種改良をするなどして産業の振興に貢献するものである。二つ目は「温帯植物採取、本国へ移送(庭園需要)型」(117)であり、これはヨーロッパの貴族をはじめとする上流階級による東洋趣味がはじまりと考えられると野間は考察している。一つ目の「熱帯植物・経済植物採取型」は主にアフリカ大陸及び東南アジアでの植物を採取したプラントハンター、二つ目の「温帯植物採取、本国へ移送(庭園需要)型」は主に中国などの南及び東アジアの植物を採取したプラントハンター、と解釈することができる。このプラントハンターの活躍という視点から、王立キュー植物園の現在の植物標本コレクションの基盤をつくりあげ、植物学的な側面で東洋との繋がりがどのようにできあがったのかについて論じる。

一人目はフランシス・マッソン (Francis Masson, 1741-1805) である。マッソンはスコットランドの植物学者であると同時に、キュー植物園の最初のプラントハンターとしても知られている。先述した当時キュー植物園の園長であったジョゼフ・バンクスによって南アフリカやアフリカ西海岸のカナリア諸島などで数百種もの植物をイギリス本国へ、特にキュー植物園に送ったとされている。この彼の植物採取場所から、先の野間 (2009) によるプラントハンター分類では「熱帯植物・経済植物採取 (食糧・薬草利用) 型」(113) に当てはまると考えられる。彼は南アフリカでの植物採集の記録を著書 *Stapeliae Novae* (1796) にまとめたり、また精密で繊細な植物画を描いて植物園に送ったりするなど、現在の王立キュー植物園が世界に誇る植物標本及び植物画コレクションの基盤をつくったと考えられる。

二人目はロバート・フォーチュン (Robert Fortune, 1812-1880) である。フォーチュンは北東アジアの植物に大変興味があり、江南 5 港開港と香港割譲と同時にイギリスにも中国の植物事情が入ってくると、ロンドン園芸協会から中国に派遣された。中国人に変装して外国人が立ち入り禁止の地域に入るなどをしていたと考えられるものの、南京条約締結以降、中国に入ったイギリス人は彼が最初とされている。野間 (2009) によると、彼の主な仕事は、中国人の苗木商から珍しい植物を購入して本国へ持ち帰ることであり、特に委託先の園芸協会が鑑賞用の植物を強く求めていたこともあり、自由に行動ができる範囲の中で植物の採集を行ったと述べている。フォーチュンの植物採取場所が東アジアであることから、彼はマッソンとは異なり、野間 (2009) のプラントハンター分類では「温帯植物採取、本国へ移送 (庭園需要) 型」(117) に該当すると考えられる。ロンドン園芸協会とキュー植物園は非常に強い関係があったため、フォーチュンが東洋で集めた植物はキュー植物園でも栽培され、多くの協会会員の関心を寄せたとと言える。

本節では王立キュー植物園の歴史と成立過程について触れた後、ウィリアム・チェンバーズによって建築学的な東洋との繋がりができる同時期に、植物を通じた東洋との繋がりがあったかどうかをプラントハンターの活躍という視点から検証した。マッソンやフォーチュンといったプラントハンターはこれに関して大きな役割を担っており、特にフォーチュンによって中国から多くの植物が送られるようになるなど、彼らによって植物学的な側面での王立キュー植物園と東洋との繋がりができあがったと考えられる。建築学的な側面でのウィリアム・チェンバーズによる中国要素導入の詳細について、次節以降で論じていく。

第2節 ウィリアム・チェンバーズの生い立ちと中国の庭園

前節では、ロンドンにある王立キュー植物園の東洋との繋がりを、植物学的な側面から分析した。18世紀後半から19世紀にかけて、プラントハンターたちによって多くの植物が東洋をはじめ世界中から持ち込まれ、その流れはウィリアム・チェンバーズによる建築学的な側面での東洋とのつながりの基盤にもなったと言える。そこで、本節ではチェンバーズの生い立ちについて調査し、どのように中国や東洋に興味や関心を示していったのかについて考察する。

ウィリアム・チェンバーズは、1723年にスウェーデンの港湾都市イエーテボリでスコットランド人夫婦の息子として生まれた。父親が商人であったため、チェンバーズ自身も商人になるために1740年までイギリスで教育を受け、その後は主に中国の広東地域とヨーロッパを中心に貿易をしていたスウェーデン東インド会社に就職し、インドや中国へ渡航を繰り返すことになった。これが、彼と中国との最初の接点であると考えられる。東アジア文化学者のGe (1992)によると、チェンバーズは滞在先であった広東において中国の寺院や仏塔のスケッチを多く描いていたという。さらにLiu (2018)によると、1743年に北京郊外の広大な離宮である円明園(えんめいえん)を訪れ、その詳細を書物として記録したという。このことから、広東や北京での滞在時に中国の建築物にかなりの興味を示していたことがわかる。この中国での滞在や、その後1750年半ばまでフランスやイタリアでの建築修行を通して中国の建築に詳しくなつたと考えられる。さらに、彼は1748年にイギリス本国宛てに中国の建築と文化の調査記録を送り、その記録が高く評価されたこともあって、帰国後に王太子フレデリック・ルイスに謁見を許されるまでに至った。この時彼は両親の意に反して、商人ではなく建築家として歩むことを決意し、1749年に9年間勤務した東インド会社を退職した。当時、東インド会社の商人としてのキャリアを歩む方が社会的地位は高かったが、ここで彼が建築家としてのキャリアを歩むことを決意した背景には、中国の建築や造園に大きな興味・関心を抱いていたのではないかと考えられる。

その後彼はローマを拠点にヨーロッパで建築を学び、1755年にはロンドンに戻って生活するようになる。1757年にはイギリス王太子ジョージとその母であるオーガスタ妃の建築教師として抜擢され、王太子が国王ジョージ3世に即位するとチェンバーズは官僚としての道を歩み始める。1758年に彼は王立キュー植物園の監督官となり、この時園内の中国風Pagodaの設計と建築を担当する。また、チェンバーズは二度にわたる中国での建築研究の成果を、4点の書物と論文に著している。*Designs of Chinese Buildings, Furniture, Dresses, Machines and Utensils*, (1757)や*A Treatise on Civil Architecture*(1759)、*A Dissertation on Oriental Gardening*, (1772)、*An Explanatory Discourse by Tan Chet-quan* (1773)の4つである。

一つ目の*Designs of Chinese Buildings, Furniture, Dresses, Machines and Utensils*は、広東での滞在経験に基づいて著されたものである。チェンバーズが滞在中に興味・関心を持った中国の建築や庭園について、彼はどのように捉え、何に魅力を感じていたのだろうか。ヨーロッパ文化学者の加藤(2014)によると、中国人の造園法に関して、自然が中国人にとって雛型となっており、彼らの目的は「自然を…(中略)…不揃いのままの姿で描写すること」(6)であると述べている。ウィリアム・テンプルが、著書の中で均整や画一性を一切欠いた中国の庭を「シャラワジ(*sharawadgi*)」という言葉を使って表現したものに近く、チェンバーズもヨーロッパの整形庭園にはない中国の庭園の不規則性という美しさに気づいたものであると解釈できる。また、この著書には中国の建築物や陶芸などの芸術作品のスケッチも多数収録されている(参考資料16~18)。その緻密なスケッチからは、チェンバーズ

が中国の建築や工芸品における芸術性も高く評価していることがうかがえる。以上のことから、彼は自然性の面においては中国の庭の不規則性、また人工性の面では中国の建築や工芸品における芸術性の高さという自然性と人工性の双方に魅力を感じていたと考えられる。

二つ目の *A Treatise on Civil Architecture* も、同じく中国を中心に彼の学んだ建築について書かれているが、この作品はホレス・ウォルポールやウィリアム・メイスンなど、多くの文学者や建築学者に読まれたことで知られている。加藤 (2015) によると、ホレス・ウォルポールはチェンバーズのこの作品を引用し、「これまでにこの専門的領域について記されたものの中で、最も理にかなない、また最も偏見のない書物である」(256) とその合理性を高く評価したと論じている。これらの著書においてチェンバーズが事細かく描写した中国像は、決して偏見や差別の目で見えたものではなく、信頼性の高い情報であることがうかがえる。

三つ目の *An Explanatory Discourse by Tan Chet-qua* であるが、これは実際にイギリスを訪れたことがあり、かつチェンバーズ自身とも繋がりがあった中国人を代弁者とし、中国の造園についてのチェンバーズの持論を展開するという話である。Ge (1992) によると、この作品において、中国人は人間による芸術より自然の優先を注意深く保っていると分析し、中国の庭園における自然と芸術の立ち位置を明確化したといえる。この点では、本作品は非常に有益な情報をヨーロッパの人々に提供できる資料ではあるが、この作品には専門性に欠けるといふ欠点も存在したと考えられる。加藤 (2014) は、建築歴史学者 John Harris らによるチェンバーズの伝記を引用し、チェンバーズは好奇心が旺盛な人や子どもじみた人たちを面白がらせるために、また疲れた頭を楽にできるように、あえて不真面目な逸話として考案したのではないかと推察している。しかし、不真面目さのある話では建築家や専門家に効果的に伝えることが難しく、ただ単に「やや風変りな造園」として多くの人に印象付けてしまったとも考えられる。

最後に、チェンバーズが 1772 年に著した *A Dissertation on Oriental Gardening* には、中国の庭園の特徴が事細かく書かれており、主に西洋の庭園にはない独自の庭園構成について具体的な例を用いながら解説されている。Chambers (1772) によると、「中国の庭師は、彼らのもつパターンに自然を取り入れ、彼らの目的は美しい不規則性 (beautiful irregularities) を模倣することである」(14) と示し、中国人がヨーロッパの整形庭園に多くみられる直線を用いることしないことを明らかにしている。しかし、「彼ら [中国人] は、彫像、胸像、浅浮き彫り、そして彫刻といったものを、庭園の他の部分や建物の周りに導入するのが好きである」(19)、「彼ら [中国人] は、それらの装飾は必要不可欠なものである」(20) と論じるなど、庭園内に人工物である彫像などの装飾品を置くことの重要性をも明らかにしている。このことから、チェンバーズが中国式庭園の特徴である「自然性と人工性の調和」について強く意識をした上で本作を著したことが考えられる。

以上のチェンバーズの生い立ちやチェンバーズの著した著書から、彼は中国の庭園をヨーロッパの庭園にはない、自然と人間の芸術の双方を尊重する新たな造園法としての魅力を感じていたと考えられる。そのため、彼はフランスを中心にヨーロッパで広く人気を博し

ていた整形庭園にも、またイギリス式風景庭園のどちらに対しても批判的な立場をとっていた可能性もある。まず整形庭園に対しては、チェンバーズは植樹や庭園の構成における規則性に反対の立場をとっており、それを表す言葉として著書 *Designs of Chinese Buildings, Furniture, Dresses, Machines, and Utensils* の中に出てくる“beautiful irregularities” (259) をチェンバーズはその例として挙げている。イタリアやフランスなどの整形庭園とは大きく異なる庭園様式であるため、庭園における不規則性は美しくないのかもしれないが、チェンバーズは中国の庭には不規則性の中にも美しさがあると新たな見解を示していることがわかる。またイギリスの風景庭園に対してはヨーロッパ文化学者の Chase (1936) は“poverty of imagination (想像力の欠如)” (523) という言葉を用い、チェンバーズは自然性を重視するあまり人間による芸術性が不足している、と風景庭園に反対の立場をとっていたと論じている。

チェンバーズがイギリス風景庭園を批判したことに対しては、中国式庭園における技巧は人工性が高すぎると批判されることも多い。しかし彼は、著書 *A Dissertation on Oriental Gardening* の中で作為を一切許容しないイギリスの庭園は野原とあまり変わらないと述べていることから、自然を単にそのままの状態にし、人間による建築や設計デザインのアイデアが垣間見られないとして、自然性と人工性の調和を風景庭園に強く求めたとも考えられる。先述した技巧の欠如と同様に、イギリスの風景庭園は自然性が高すぎるために、あたかも偶然できてしまったかのような庭園として捉え、痛烈に批判していることがよく分かる。

チェンバーズはこれらの書物・作品を著したのち、1770年にスウェーデン国王から北極星勲位が与えられる他、王太子時代に自身が建築教師を務めたイギリス国王ジョージ3世からは騎士の称号が与えられている。チェンバーズは当初商人であったが、中国・広東への渡航と現地での滞在を通して、次第に中国の建築や造園に興味を示していった。さらに多くの書物を出版する他、王太子や国王からもその業績を高く評価されるに至った。彼がここまで中国の庭園に興味・関心を示すようになったのは、イギリスをはじめヨーロッパの造園にやや疑問を抱いていたことも考えられるが、先述の通り中国の庭園における自然性と人工性の調和に魅力を感じたからというのが一番の大きな要因ではないか。自然をただそのままにした庭園を造るのでもなく、また規則性を重視して人工色の強い庭園を造るのでもない、庭園内における建築物や工芸品を通して人間のもつ創造性や芸術性を自然本来のもつ美しさと調和させるという高度な技術を、ヨーロッパに伝えようとしたのではないかと考えられる。

以上のように本節では、ウィリアム・チェンバーズの生い立ちや彼の生涯、また彼の著した書物・作品を分析することを通して、彼がどのように中国に興味を持ち、中国の庭園をどのように捉えていたのかについて分析した。そして、チェンバーズはフランスやイタリアの整形庭園やイギリスの風景庭園を批判し、不規則な植栽や建築及び芸術作品のある「自然性と人工性の調和」のとれた中国の庭園に魅力を感じていたことが明らかになった。

第3節 *A Dissertation on Oriental Gardening*に見る王立キュー植物園における中国式庭園要素の導入

前節では、ウィリアム・チェンバーズの生い立ちや、彼の著した書物を分析し、そこから彼が中国の庭園や建築における「自然性と人工性の調和」に魅力を感じていたことが明らかになった。本節では、この「自然性と人工性の調和」を中国式庭園の重要な要素であるとし、実際にチェンバーズが造園の監督官を務めた王立キュー植物園において、それはどのように活かされていったのかについて検証する。

チェンバーズが造園を担当したのは、1757年から1772年までの15年間とされており、また*A Dissertation on Oriental Gardening*が出版されたのは前節で紹介した通り1772年のことである。そのため、この著書は彼の造園研究の集大成でもあり同時に、王立キュー植物園の造園と大きく関係のある著書でもあることが考えられる。以下では、この作品から中国式庭園の特徴や、実際に彼が王立キュー植物園を造園するにあたって重要視したと考えられる点を引用し、検証していく。

チェンバーズは、*A Dissertation on Oriental Gardening*において中国式庭園内の場面(scenes)についてかなり詳細に記されている。この場面についての記述は、チェンバーズが中国式庭園の魅力の中でも最も魅力を感じた点であると同時に、王立キュー植物園に実際に取り入れた造園法であると考えられる。この場面をどのように分けるのかについて、チェンバーズは具体的な例として「四季」による分け方を取り上げ、それぞれの季節の庭園内における表現の仕方について解説している。なおChambers (1772)によると、彼は四季を日本やヨーロッパのそれとは異なる「冬」「春」「夏」「秋」の順で記したため、それぞれの風景の特徴についてこの四季の順で分析していく。また建築学者の岡・土井(1999)の論を参考に、それぞれの季節の場面に、王立キュー植物園のどの区画や場面がそれに対応するかについても分析していくことで、実際にChambers (1772)の中の四季によって場面分けをする造園法や「自然性と人工性の調和」という中国式庭園の要素がキュー植物園内の造園に導入されていったことを明らかにする。さらに、チェンバーズはそれぞれの場面や建築物のスケッチを*Plans, Elevations, Sections and Perspective Views of the Gardens and Buildings at Kew* (1763)に載せており、ここではこの著書内にあるスケッチを参考資料として提示する。また、先行研究から推察される当時のキュー植物園の地図(参考資料28)も参考にしながら、当時の庭園の場面がどのようなものであったのかについて考察する。

まず「冬」の場面について、Chambers (1772)によると、冬の場面は「一般的に南側の太陽に向かっているマツ、モミ、杉、オーク、フィレリア、ヒイラギ、イチイ、ジュニパー、および他の多くの常緑樹で構成され…(中略)…陽気さや多様さを添える」(25)や「温室と呼ばれる建物には、イチゴ、ウメ、イチジク、グレープ、アプリコットが栽培されている」(26)と記している。中国の造園でいう「冬」は、果物が実り、常緑樹が緑の葉を茂らせている温かい場面であると推測される。岡・土井(1999)は、この「冬」の場面对応するのは、植物園内における温室であり、これが本作品で述べられているガラスの温室に対応して

いると推察している。なお、特に彼らが示している「温室」とは、第1節で示したオレンジなどの果物を栽培するためにチェンバーズが設計した温室である **Orangery** (参考資料 19・20) が当てはまると考えられる。造園学者の河原 (2007) は中国式庭園における季節ごとの植栽を西湖風景区の例を用い、冬の季節に関しては、梅や松、柏などの樹を植えると論じているが、彼の強調する「冬景蒼翠」(76) や、「冬の樹木は… (中略) …、寂しさと関連した独特の精神的内観を尊重している。雪に耐える蒼翠は逆境に立ち向かう品格を、冬芽に秘める生命の火は、春への期待に人生哲学を思わせる」(76) という中国式庭園の植栽法は、チェンバーズの紹介している「冬」の植栽とは異なっていると考えられる。

次に「春」の場面であるが、**Chambers** (1772) は「彼ら〔中国人〕の春の場面は、同様に常緑樹に満ちており、あらゆる種類のライラック、キングサリ、ライム、サンザシ… (中略) …バラなどが混在している」(26-27)、「彼ら〔中国人〕は… (中略) …動物園、そして… (中略) …鳥小屋、鶏小屋と果樹園、酪農場… (中略) …といった建物を配置させる」(27) と論じている。「冬」の場面と比較して常緑樹の木々よりも色とりどりの花が咲き、動物や鳥類の生息を身近に感じることのできる構成となっている。本作品で述べられている他のどの季節の場面よりも明るいイメージが読み取ることができ、日本やヨーロッパでの春のイメージとあまり大差がないようにも思われる。岡・土井 (1999) はこの「春」の場面に対応するのは、植物研究所や花園、果樹園のある区画であるとし、また園内の鳥小屋や動物園も、チェンバーズの著した本文中のそれらに対応していると論じている。しかし、鳥小屋と動物園に関しては、チェンバーズによるキュー植物園の造園プランには書かれ、**Aviary** (鳥小屋・参考資料 21) と **Menagerie** (動物園・参考資料 22) が 1760 年に造られたものの、現存はしていない。現在その場面がわかるのは植物研究所の部分や、その他の区画で咲き誇る花々のみとなってしまっていると考えられる。この「春」の場面を中国式庭園の植栽と比較してみると、河原 (2007) の「春花爛漫」(76) には大いに当てはまっていると考えられる。彼は春の植栽について、桃や桜の花を例として挙げており、チェンバーズの紹介した植物と異なっている。春になると花が咲くという点では共通しているものの、チェンバーズはヨーロッパでは育ちにくい東洋原産の植物ではなく、ライラックやキングサリなどヨーロッパ原産の植物で春に開花するものを植えることで季節感を出そうと試みたと考えられる。

続いて「夏」の場面について、**Chambers** (1772) は「夏の場面は、庭の中で最も豊かで最も考えられた部分」(27) であるとし、かなり多くの記述をしている。植物については、「木々はオーク、栗、ニレ、アッシュ、プラタナス… (中略) …など中国の独特な木々からなる」(28) と紹介し、中国固有の樹木が植えられているようである。建築物については、「池や川など、水に関する作品で構成されている」(27) と述べるように、人工的に水を引き、池や川を造成することの必要性についても彼は論じている。さらに、「優美な四阿 (**pavilion**) が存在」(30) し、この四阿は夫人の住居にもなると同時に、その他の庭園内の多くの建物では庭園に仕える女官たちが主人を音楽や舞で楽しませるとも記している。このことから、チェンバーズは比較的規模が大きい庭園で、主人が避暑や別荘として夏の期

間に滞在するような庭園をモデルとしたと考えられる。この場面は岡・土井（1999）によると、キュー植物園内の1749年に建設され、チェンバーズ自身が設計した House of Confucius（孔子廟・参考資料 23）が対応していると論じている。しかし、この建物についても現存はしておらず、現存する中国風の建築物は Pagoda（中国風パゴダ・参考資料 24・25）のみとなってしまうが、この建物も中国では主人をはじめ庭園を訪れる人が庭園を見渡すために造られたものであり、House of Confucius とはやや異なることや、その他の「夏」の場面を表す区域とかなり離れているという点もあるものの、この「夏」の場面に対応するものの一つであると考えられる。さらにチェンバーズによるプランでは植物園の面積に占める池の割合がかなり高く、池には Chinese Bridge（中国風の橋）も建設されるはずであった。実際には植物園内の中央付近に小さな池と橋が現存しているが、現在の橋は中国風ではなく、Sackler Crossing（参考資料 26）と呼ばれる現代風の橋が架かっているのみである。このことから、チェンバーズは中国での庭園の利用から「夏」の場面の重要性を説き、その詳細について多くのことを記したものの、キュー植物園では実際に造られなかったり、造られたものの現存していなかったりするものが多いことが読み取れる。さらに中国式庭園の「夏」の植栽と比較してみると、河原（2007）は蓮や蘭、紫薇（百日紅）といった植物を植えることと述べていることから、「冬」や「春」と同様にチェンバーズの「夏」の場面の植栽についての記述とは異なっていることがわかる。

最後に「秋」の場面であるが、Chambers（1772）によると「秋の風景のプランテーションは、多くの種類のオーク、ブナ、および葉を保持している他の落葉樹で構成されており、その衰退に豊富で多彩な色を与える」（37）、また「この場面における建築物は、一般的に衰退を示している」（38）と述べられている。落葉樹や腐った木々などが植えられ、廃墟のような建築物が建てられるのである。実際にキュー植物園では、チェンバーズの本文中にある「半壊した門（half buried triumphal arches）」（38）が1759年に建てられ（参考資料 27）、現在でも植物園内東側に Ruined Arch（廃墟の門）として存在していることから、この門が「秋」の場面对応していると考えられる。しかし、この「秋」の場面の植栽に関しても、チェンバーズの紹介した中国の植栽と、実際の中国式庭園の植栽とは大きく異なっている。河原（2007）は中国式庭園における「秋」の植栽を「秋色絢爛」（76）と表現し、秋における落葉樹の紅葉とその葉が落ちる様を美とする中国人の自然に対する感情を論じている。このことから、チェンバーズの「秋」の植栽と中国式庭園の「秋」の植栽は秋になると紅葉する落葉樹を植えるという点では共通しているものの、秋の落葉を「衰退」の景色と捉えるか「絢爛」の景色と捉えるかで大きく異なっている。

チェンバーズは中国で建築を学んだ集大成として *A Dissertation on Oriental Gardening* を著したと考えられ、この著書内での中国の庭園における「四季」を重視した場面分けに関する記述は王立キュー植物園内の造園プランや現存する建築物と当てはまるところがあり、現存はしていないものの、王立キュー植物園に中国式庭園の要素を導入しようとしたと考えられる。しかし「自然性と人工性の調和」に関して、チェンバーズはそれぞれの季節ごと

に植物種という自然性の一面と建築物という人工性の一面の双方を記しており、この両方を調和させながら造園することが中国の庭園の特徴であるという主張を持っていた同時に、キュー植物園の造園においてもかなり意識をして造園プランを考えていたと推察することができる。だが、四季の場面ごとに植える植物に関しては、チェンバーズの紹介した植栽と実際の中国式庭園での植栽とでは大きく異なっている点が明らかになった。チェンバーズは「四季」の変化という中国式庭園の重要な特徴を掴むことができたものの、季節ごとの中国特有の植物や花について、また中国人の植物や庭園に対する美意識は十分に紹介することができなかつたと考えられる。また、「春」の場面のように、ヨーロッパにおいて屋外での生育がまだ厳しかった中国原産の植物を表記するのではなく、ヨーロッパに元からある植物を代わりに表記したことも考えられるだろう。

本節では、ウィリアム・チェンバーズが造園を担当した王立キュー植物園において、どのような中国式庭園の要素が導入されていったのかについて、彼の著書である *A Dissertation on Oriental Gardening* を用いて「四季」による場面分けと「自然性と人工性の調和」という点から分析した。チェンバーズは中国人が四季による季節感を重視して植栽を工夫している点に着目し、王立キュー植物園内において「冬」「春」「夏」「秋」という四季それぞれに対応する場面分けを行ったことが明らかになった。また彼は、それぞれの場面において、中国の植物や中国人の植物に対する美意識などは十分に理解できていなかったものの、それぞれの季節ごとに植物という「自然性」と建築物という「人工性」を調和させることを、中国式庭園の特徴として強く意識していたと考えられる。

第4節 ウィリアム・チェンバーズによる中国式庭園要素の導入の意図

前節では、ウィリアム・チェンバーズが「四季」の変化と「自然性と人工性の調和」という中国式庭園の特徴を王立キュー植物園に導入したことを、著書である *A Dissertation on Oriental Gardening* を用いて明らかにした。そこで本節では、彼の中国式庭園要素導入の意図について、3つの説を立てて考察したい。

一つ目の説は、チェンバーズの後任として造園担当であったランスロット・ブラウンらの風景庭園に対抗する意図があったと考えられることである。チェンバーズの著作 *A Dissertation on Oriental Gardening* でも、中国の庭園は植物学者だけでなく画家や哲学者にもよるものであると述べた上で、様々な芸術家に関わるものであるべきと主張し、また庭師は想像力を解き放つべきであると、彼は人間の独創性の重要性をかなり強調している。

このチェンバーズの主張を踏まえ、加藤(2015)は、チェンバーズの庭園論はイギリス式風景庭園の反証として中国の庭園について論じたものであるとし、彼はイギリス式風景庭園には想像力が欠けていることを指摘したかったのではないかと論じている。イギリス式風景庭園は自然性を重視するあまり、人工の庭園ではあるものの中国の庭園のように建築物と周りの自然物との組み合わせにおける工夫がやや欠如していると考えられる。Liu(2018)もまた、チェンバーズは本物の自然に倣うというよりもむしろ人間による想像力

を活かすという中国の造園方法をイギリスにも導入するべきだと主張したと考察している。第2章第2節において触れた Chase (1936) の“poverty of imagination” (523) という言葉を用いてチェンバーズの風景庭園への批判について論じたが、*Dissertation on Oriental Gardening* などのチェンバーズの手紙からも、彼がブラウンの風景庭園を批判したかった可能性が高いと考えられる。

さらに岡・土居 (1999) は、1772年にチェンバーズがキュー植物園の主任造園家の立場を失うと同時にブラウンがその役職に就いたことから、キュー植物園における指導的立場の喪失及び今後のキュー植物園における造園の変更を危惧したからではないかと説いている。実際にチェンバーズは、王立キュー植物園主任造園家の任期満了の年までに中国式庭園についての詳細や、中国庭園に対する考え方を *A Dissertation on Oriental Gardening* に著したり、*Plans, Elevations, Sections, and Perspective Views of the Gardens and Buildings at Kew* にキュー植物園内にチェンバーズ自身がデザインした建築物の設計図及びキュー植物園内の風景画を掲載したりしている。このことから、庭園論上対立するブラウンによって、キュー植物園が風景庭園のように再び改造されてしまうことを恐れていたことや、中国式庭園の要素を取り入れたキュー植物園の背景にある自身の庭園論を守ろうとしたと考えられる。

二つ目は、チェンバーズはイギリスの植民地政策の及んでいた中国の庭園を導入することによって「新しいイギリスらしい庭園」を造り上げ、その植民地政策によるイギリスの力の大きさを庭園という文化でもって対外的に示すことが目的であったのではないかと、という説である。18世紀後半以降、第2章第1節で紹介した通り世界中から多くの植物の標本がプラントハンターらによって集められ、王立キュー植物園は大英帝国の植物学ネットワークの中心的存在となっていった。チェンバーズが造園を担当する以前は、この植物園のある場所には王室の宮殿とヨーロッパの各地から集められた植物で構成された庭があったのみで中国や東洋といった異国情緒はあまり感じさせなかった。しかし、17世紀後半から徐々に広まっていった中国趣味の流行を受けて、18世紀になってからチェンバーズが王立の植物園で中国や東洋の庭園要素を大々的に取り入れることを通して、キュー植物園が植物学的側面も含めて異国情緒あふれる王立植物園になる基礎を築いたとも考えられる。

西洋史学者の川島 (1999) はイギリスにおける折衷主義に関して、18世紀から19世紀のイギリスにおいて、帝国主義のイデオロギーが最もイギリス国民の心を捉えていたときに、帝国（東洋などの植民地）の要素とイングランドの要素という2つの対立する「イギリスらしさ」が共存する折衷主義的な性格が見られると論じている。このことからチェンバーズは、イギリス王室のもつ王立キュー植物園において、植民地の一つでもあった中国の庭園要素を導入し、イギリスの庭園であることを念頭に置いた上で折衷主義的な庭園を造り上げることを意図していたとも考えられる。つまりチェンバーズにとって、「イギリスらしさ」とはイギリスの庭園において帝国としての植民地の要素を取り入れながら折衷的な庭園を造り上げることであり、対内的にはそれを多くの人々に享受してもらい、対外的にはそれを

大英帝国の強さとしてアピールすることも意図していたのではなかろうか。

三つ目は、チェンバーズは当時ヨーロッパで流行していた中国趣味に疑問を抱いていたということである。第1章第3節でも論じたように、17世紀半ばからイギリスやフランスを中心にヨーロッパの貴族階級で中国の陶磁器といった作品のデザインが流行していった。しかし、当時中国のそのデザインや芸術について現地に赴いたり、現地の人から直接習ったりすることはあまり見られなかった。そしてそのまま建築や庭園など広く芸術作品にもこの中国趣味が見られるようになっていった。日本文化及び文化交流史学者の片平（2010）によると、この当時の中国趣味は中国から伝わった様式というより、ヨーロッパの生み出した「想像上の中国」（38）がモチーフであり、それは独特の装飾性やデザイン性であったと分析している。チェンバーズはこの「想像上の中国」に疑問を抱き、商人という職業柄を活かして自ら中国・広東に渡り、自身の目で中国の建築や庭園を見て学び、書物にその詳細を記載したりスケッチに描写したりしていた。彼はヨーロッパ化してしまった中国像を庭園に取り入れることはせず、自身で学んできた中国の建築学及び造園学を王立キュー植物園の主任造園家として活かし、冬・春・夏・秋の四季で場面分けされた区画や多くの寺院建築に中国式庭園要素を本質的に導入していったことが推察される。片平は中国趣味及び庭園における中国要素の導入に関して、19世紀のイギリス人建築家ジョサイア・コンドルの説を用いて、イギリスの風景庭園の「自然らしさ」を破壊する大きな要因であり、極端な人為性であると批判している。しかしチェンバーズによる自然性と人工性の調和のとれた、また単なる中国「趣味」にとどまることなく、その本質まで理解した上でのキュー植物園での造園は、彼にしかできなかった偉業であると考えられる。

本節では、ウィリアム・チェンバーズはイギリス式の風景庭園の第一人者でもあるブラウンを批判する目的として、またイギリスの帝国主義の力の誇示及びそれによる折衷主義としての新しいイギリスらしさを模索する目的として、そしてうわべだけのヨーロッパ化してしまった中国趣味を批判する目的として、という3つの意図により、王立キュー植物園において中国式庭園の要素を導入しようとしたことが推察された。

本章では、王立キュー植物園の歴史及び成立過程に触れたのち、植物学的な側面での東洋との繋がりについてプラントハンターの実績を用いて明らかにした。また、ウィリアム・チェンバーズの生い立ちと彼の著作物について紹介し、その中でも最も中国の庭園の詳細が書かれている *A Dissertation on Oriental Gardening* を用いることで、どのような中国式庭園の要素が王立キュー植物園に導入されたのかについて分析した。チェンバーズは、自身の中国での滞在で中国式庭園の「自然性と人工性の調和」に興味を持ち、「四季」という東洋特有の季節感をベースに、王立キュー植物園の庭園内に季節に合わせた植栽や建築物を場面ごとに配置していったことが明らかになった。このような中国式庭園の要素を王立キュー植物園に導入したのは、チェンバーズに風景庭園造園家のランスロット・ブラウンを批判するため、帝国の要素を取り入れた折衷的な庭園を新しいイギリスら

しさとしての庭園として造るため、また当時のうわべだけの中国趣味を批判するため、という3つの目的からなされたものであると考えられる。

第3章 中国風庭園のイギリス及びヨーロッパ諸国への影響

前章では、王立キュー植物園とウィリアム・チェンバーズに焦点を当て、彼が中国式庭園の要素や特徴である「自然性と人工性の調和」や「四季」の変化を活かした場面分けを王立キュー植物園に導入したことを明らかにした。また、それにはイギリス式風景庭園のブラウンへの批判をするためなどのいくつかの目的があったことも推察された。本章では、この導入によって現代のイギリス社会において王立キュー植物園がどのような役割を担うようになったのかについて考察する。そのうえで、王立キュー植物園のみではなく、中国趣味やチェンバーズの影響を受けて中国要素を導入した庭園を含めた特徴的な庭園文化が他のイギリスの庭園やヨーロッパ諸国の庭園まで影響を与えたのかについて明らかにする。

第1節 現代における王立キュー植物園とその役割

ウィリアム・チェンバーズによって中国要素が導入された王立キュー植物園の庭園は、彼の弟子であったブラウンによって大きく変えられてしまうことになったが、**Pagoda** や **Orangery** などの一部の建築物は残されたり、復元されたりして今も残っている。では、わずかにではあるものの中国や東洋の面影を残す王立キュー植物園は、建築学的な側面だけではなく、植物学的な側面を含めて現代のイギリス社会にどのようなメッセージを与えているのだろうか。本節ではこの問いについて論じる。

まず、王立キュー植物園を舞台にした短編小説作品から、当時この植物園がどのように評価されていたのかについて考察する。チェンバーズによる中国要素の導入及びブラウンによる再造園から10年以上経過し、超大国としてイギリスの帝国主義が全盛期に、イギリス人小説家であり、かつ評論家のヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) は、短編 *Kew Gardens* (1919) を執筆し、出版している。この短編は、彼女自身がキュー植物園に多く訪れていたこともあり、この植物園を舞台に「全知の語り手」という技法を用いて、植物園内の様子を植物や蝸牛、来園者のカップルなどを通して描いているのが特徴的である。英文学者の **McVicker** (1992) は作品内で度々言及される特異的な庭園内の植物や独特な建築について触れ、この作品をウルフによる帝国主義への批判であるとしている。実際に **Woolf** (1919/2017) によると、インド原産である蓮 “water-lilies” (13) や東洋原産の蘭の花 “orchids” (35)、中国原産の棕櫚 (シュロ) の木のある温室 “the glass roofs of the palm house” (37)、チェンバーズの建てた中国式の塔 “Chinese pagoda” (35) の記述があるなど、イギリスの庭園らしさを感じさせない植物種や建築の描写があることから、ウルフには **McVicker** の主張する帝国主義への批判の意図があったと考えられる。

さらに人文学者 **Saguaro** (2006) も「イギリスの植物帝国主義」(11) という言葉を用いて、医学や科学、商業、農業、自国の園芸学、そして風景など多岐にわたる分野においてキュー植物園はイギリスの帝国主義とともに発展してきたのであり、ウルフの *Kew Gardens* においてもそれに対する批判がなされているとしている。ウルフはロンドンのブルームズベリー・グループの一員であり、他のロンドンの小説家や批評家と多く交流があったと考

えられる。また、そのような彼女がこの植物園に頻繁に足を運んでいたことから、彼女の鋭い洞察力でこの植物園とイギリスの帝国主義を結び付けて考えていた可能性が高い。また、ウルフと同じくブルームズベリー・グループの一員であった小説家の E.M.フォースターがこの作品に対してコメントをしている。英文学者の石田（2013）は、1919年7月31日の新聞 *Dairy News* にて、フォースターがこの作品は極めて独特の、そして unEnglish なものであると述べたと論じている。彼はウルフの作品を総称して“unEnglish”という表現を使ったため、彼女の文体や独特な語り手、また「意識の流れ」とよばれるストーリー構成に対しての言葉であるとも考えられる。しかし、先述した通り多くの批評家がこの作品での植物園と帝国主義との繋がり、及びウルフのそれに対する批判について言及している。このことから、キュー植物園が帝国主義の影響を大きく受けて“unEnglish”なものになっていたことを受け、ウルフもこの短編小説を書くにあたって文体や描写方法を“unEnglish”なものにしたと推察できる。

次に、植物園全体として以上のような特徴をもつ王立キュー植物園が現代のイギリス社会とどのような繋がりを持っていたり、役割を担っていたりするのかについて考察する。今日、王立キュー植物園にはロンドン市民はもちろんのこと、世界中から年間 170 万人以上の来場者が訪れるロンドン市内屈指の人気の観光地となっている。チェンバーズの中国の庭園要素をイギリス庭園に導入するという意匠は叶わなかったが、現在でもイギリス式に美しく造園された庭園、大英帝国時代の面影を今に伝える大きな温室や、その温室内にあるプラントハンターが世界中から集めた植物が残っている。それらからは、イギリスの帝国主義とともに植物園が発展してきたという事実がよくわかる。

植物学的側面からでは、現代においてキュー植物園は研究機関としての機能が大きい。過去 2 世紀以上に渡って、キュー植物園は 7000 万点以上の植物を世界中から集め、標本として所蔵しているからである。園内にある附属の図書館には世界最多の所蔵数ともいえる植物画、書籍があり、イギリスをはじめ世界中の植物学研究者に研究施設として利用されている。また、絶滅寸前の植物種の保全や生物多様性を守るための様々な研究活動を行う拠点としても機能しているという。また来場者向けには温室での植物の展示以外にも、園内で様々なイベントが頻繁に行われており、植物や自然に対して幼い子どもでも興味を持ってもらえるような取り組みがなされている。このことから、植物学的な側面では、王立キュー植物園はこれまでの帝国主義によって世界中から多くの植物を集め、膨大な資料を保有していることを活かし、世界の植物学研究および環境保全活動の中核としての機能することが、現代におけるこの植物園の役割であると考えられる。

建築学的側面では、イギリスの歴史を伝える役割があると考えられる。チェンバーズによって建てられた Great Pagoda やいくつかの Temple、Orangery の他、20 世紀後半から 21 世紀初頭に日本から移築復元された Minka House & Bamboo Garden や Japanese Gateway といった建築物も存在し、かつてはもちろんのこと、現代においても東洋の建築物をイギリスの庭園に取り入れることを続けている。これらの東洋以外の建築物であって

も、世界最大級の規模を誇る *Temperate House* をはじめとする大温室からは、当時の最新技術を結集させ、また長い年月をかけて巨大な温室を造り上げることができたというヴィクトリア朝時代の当時の繁栄が見て取れる。このことから、建築学的な側面からは、イギリスが現代まで歩んできた歴史を今に伝える役割が大きいと考えられる。2018 年に *Great Pagoda* 及び大温室である *Temperate House* の修復が終わったが、イギリスがこれまで歩んできた時代を伝える歴史博物館のような役割を担うためには、現在残っている貴重な建築物の修復や保全を行うことが必要不可欠であろう。

チェンバーズが中国要素を導入した後、ブラウンによって一瞬にして園内の多くの部分がイギリス式の風景庭園に改造されてしまった。しかし、大英帝国のもつ広範な植民地から輸入した多くの植物種や、わずかではあるものの残されたチェンバーズによる建築物やその後日本などから移築したエキゾチックな建築物からは、王立キュー植物園がイギリスの植物園ネットワークの中心としての役割を担っていたことや、この植物園での植物の研究や造園及び建築などが帝国主義とともに発展してきたことがイギリス市民をはじめ訪れる人に容易に感じ取ることができると考えられる。このことから、現代の王立キュー植物園は植物学や農業、医学だけではなく、風景や建築など多くの分野を巻き込んだ歴史をイギリスの人々はもちろんのこと、世界中から訪れる観光客が感じ取ることができる場所となっていると言える。

本節では、ヴァージニア・ウルフの短編小説である *Kew Gardens* (1919) で描かれている現代の王立キュー植物園とそれに対する学者や批評家による評価を用いながら、現代におけるキュー植物園の状況に触れ、現代のイギリス社会とキュー植物園がどのような繋がりを持っているかについて考察した。植物学や農学をはじめとするイギリスにおける多岐にわたる分野の歴史を今に伝える博物館のような役割をもつ施設としての役割を持っていることが分かった。さらに、これまで所蔵してきた膨大な資料や植物標本、培ってきた高い研究スキルを活かしていくことで、世界の環境保全に貢献していく研究機関として、庭園や植物園の枠を超えた役割を担っていることも明らかになった。

第2節 イギリスにおける中国風庭園文化とヨーロッパ諸国への影響

前節では、王立キュー植物園は中国を含む植民地から植物学や農業などの多くの要素が入り、その歴史を現代のイギリス社会に伝える博物館のような役割があることが明らかになった。そこで本節では、王立キュー植物園だけではなく、中国趣味やチェンバーズによる中国式庭園要素の導入によってできあがった庭園様式が、他のイギリス国内の庭園や、ヨーロッパ諸国の庭園にどのような影響を与えたのかについて明らかにする。

まず、王立キュー植物園で行われたウィリアム・チェンバーズによる中国式庭園要素の導入が、後のイギリスの庭園にどのような影響を与えたのかについて考察する。第2章第3節で触れた通り、チェンバーズが王立キュー植物園に中国要素を導入した18世紀後半当時、イギリスではブラウンによる風景庭園が貴族の所有する庭園などで流行していた。しかし、

いくつかの庭園では中国風の塔や四阿といった建築物が園内に建てられたり、移築されたりした。具体的な例としては、サリー州ウィズレーにあるウィズレー王立園芸協会植物園 (Royal Horticultural Society's Garden at Wisley)、ベッドフォードシャー州ウォバーンにあるカントリー・ハウスであるウォバーン・アビー (Woburn Abbey and Gardens) の庭園、ロンドン郊外のクリブデンにあるクリブデン・ハウス (Cliveden House) の庭園である。

一つ目のウィズレー王立園芸協会植物園は、1878年に実業家であり、かつ園芸協会会員のジョージ・ファーガソン・ウィルソンが造った、外来種を含めた主に養樹を目的とした植物園である。この植物園内は、巨大な温室やロック・ガーデン、樹木の栽培・研究所など多彩な施設とエリアで構成されているが、なかでも風景庭園である **Seven Acres** のエリアにある池のほとりに、**Oriental Pagoda** と呼ばれる中国式の四阿が存在する。この **Pagoda** は、キュー植物園に建てられた幾層からなる見物用の塔ではないものの、中国古典庭園建築の伝統を受け継いだ蘇州の拙政園にある四阿に類似していることから、中国式庭園の四阿を模して造られたと推測できる。またこのエリアでは、池の周りに様々な種類の樹木が植えられ、秋はメタセコイヤやカエデの紅葉、冬はハナミズキや沈丁花、春はボタンの花というように、四季折々の風景を見ることができ。常緑樹が多く植えられる一般的なイギリス式の風景庭園ではなく、ウィリアム・チェンバーズの著書 *A Dissertation on Oriental Gardening* に示した四季の風景を植物園内に取り入れたことから、東洋の自然観が積極的にイギリスの庭園に取り入れられていったと考えられる。

二つ目のウォバーン・アビーの庭園には、**The Chinese Dairy** (参考資料 29) と呼ばれる中国風庭園が存在する。イギリス人建築家のヘンリー・ホランド (Henry Holland, 1745-1806) が 1787 年に造ったもので、彼はブラウンのもとで建築を学んだものの、当時の中国趣味で輸入された中国式庭園と建築に影響を受けてこの **The Chinese Dairy** を設計したと考えられる。さらに、この建築物が臨む池には鯉が泳ぎ、また周りには中国やその他東洋からの樹木が多く植えられている。建築物だけでなく、周りの風景をも中国にある庭園の風景に似せたという点では、他の庭園にはない特徴である。

三つ目のクリブデン・ハウスの庭園は、第 2 代バッキンガム公爵が 1666 年に購入し、その後多くの貴族たちが住んだカントリー・ハウスにある庭園で、現在は歴史的建造物や景観の保護を目的とした団体であるナショナルトラストがこの館と庭園の管理を行っている。庭園には **Water Garden** と呼ばれるエリアがあり、1867 年のパリ万国博覧会で展示された **Chinese Pagoda** (参考資料 30) が 1900 年にここに移築された。この **Pagoda** もウィズレー王立園芸協会植物園にもと同様に四阿のような低層のものであるが、二層構造であること、断面が六角形もしくは八角形であること、屋根と柱に見られる中国式の装飾などから、ウィリアム・チェンバーズの著書である *Plans, Elevations, Sections, and Perspective Views of the Gardens and Buildings at Kew* (1763) に設計図のある **Menagerie** (参考資料 31) に類似している。**Menagerie** は主に外来動物の展示をする動物園のような役割を担っ

ていたが、クリブデン・ハウスでは庭園を鑑賞するための四阿としての目的で建てられている。このことが相違点ではあるものの、中国趣味に魅了された他の建築家が、チェンバーズの描いた設計図を手本にして中国の庭園建築の設計を試みたと推察される。

以上のイギリス国内での中国式建築の導入の事例から、チェンバーズが王立キュー植物園に中国要素を導入した後も、イギリスの植物園や庭園に中国式建築が建てられたり、中国など東洋原産の植物を植えたりしたことが明らかになった。これらの中国式建築物は、現在イギリスでは東洋趣味は流行していないものの、植物園や庭園それぞれのシンボルとして大切に保存され、修復され続けている。そしてそれらは、イギリスがかつて大英帝国として中国を支配していただけでなく、建築という芸術をイギリスの文化の中に導入することによって人々がそれを享受していたという歴史的事実を今に伝える役割を持っている。イギリスには王立キュー植物園をはじめ、チェンバーズや彼の影響を受けた建築家によって中国式庭園や中国式建築がイギリス式庭園の中に導入した植物園や庭園が多く見られることが明らかになった。このようなイギリスの特徴的な庭園様式を「イギリス中国風庭園」と本論文では呼ぶことにする。

このようなイギリス中国風庭園はイギリス以外のヨーロッパ諸国に輸出されていったのだろうか。フランスでは、中国趣味を表す“Chinoiserie”（シノワズリ）という言葉がフランス語であるように、中国趣味が大いに流行した。フランス人画家のフランソワ・ブーシェ（François Boucher, 1703-70）は、1740年代から中国をテーマにした作品を多く描き、絵画によってフランスにおける中国像を広めた。彼の代表的なシノワズリ作品として「中国の庭（*Vue d'un jardin chinois*）」（参考資料 32）があり、中国の庭園の様子がこれらの作品を通して伝えられた。フランス人イエズス会宣教師のジャン＝ドニ・アティレ（Jean-Denis Attiret, 1702-68）も著書 *A Particular Account of the Emperor of China's Gardens near Peking* (1743) で中国式庭園の詳細を伝えた。しかし、Attiret (1743/1752) は“a beautiful Disorder, and a wondering as far as possible from all the Rules of Art（無秩序の美しさであり、芸術のルールからの逸脱である）”（38）と中国式庭園について批判しているように、ヴェルサイユ宮殿をはじめとする整形庭園が確立された後の 18 世紀前半のフランスでは、中国式庭園はフランスの庭園に導入されなかった。

しかし 18 世紀後半になると、ジャン・ジャック・ルソーの『新エロイズ（*Julie, ou la nouvelle Héloïse*）』（1761）による自然思想の転換によってイギリスから風景庭園が輸入されると、“Jardin Anglo-Chinois”としてフランスで流行した。ズイレン（1999）によると、パリ西部にある「レの荒野（*The Désert de Retz*）」には、曲がりくねった園路や壊れた円柱、洞窟などがあり、チェンバーズの影響を受けた中国風の建物もあるという。「レの荒野」の平面図（参考資料 33）を見ると、その不規則性から風景庭園が輸入されたことがよくわかる。White（2017）は、この中国風の建物について、モンヴィル男爵がこの庭園を訪れた際の住居として建てられたと論じている。フランスでは、中国風庭園はフランス独自では誕生しなかったものの、18 世紀後期になってからイギリスの庭園文化として風景庭園と中国

式庭園が混在したものが輸入されたと考えられる。チェンバーズは風景庭園を批判するために中国式庭園をイギリスの庭園に導入したが、フランスではそれが合わさった庭園様式がイギリスの庭園として伝わってしまったと推察できる。

ドイツでも同様に、独自に中国風庭園は造られることはなく、ウィリアム・チェンバーズによるイギリス中国風庭園の影響を受けて中国式庭園建築が造られた。バイエルン州のミュンヘンにはエングリッシャー・ガルテン (**Englischer Garten**) という広大な公園があるが、この公園はイギリス式風景庭園に由来するものの、園内にはキュー植物園の **Great Pagoda** をモデルにした **Chinesischer Turm** と呼ばれる中国式の塔が建てられている。こちらもフランスと同様に風景庭園と中国風庭園が両立してしまっている。ウィリアム・チェンバーズの中国式庭園や建築の要素を導入した庭園は、塔をはじめとする中国式建築がブラウンの確立したイギリス式風景庭園の中に建てられるという彼の意に反する形でフランスやドイツをはじめとするヨーロッパ諸国に輸出されたと考えられる。

イギリスには王立キュー植物園をはじめ、チェンバーズや彼の影響を受けた建築家によって中国式庭園や中国式建築がイギリス式庭園の中に導入した植物園や庭園が多く見られ、国外でも見られるものの、これらはイギリス発祥の文化であることが明らかになった。このウィリアム・チェンバーズによるイギリス中国風庭園の影響力は、イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国においてかなり大きかったものであると言え、王立キュー植物園でのチェンバーズによる中国要素導入はその最初の場所であり、かつチェンバーズの意図が最も表れた庭園であると言える。

本節ではウィリアム・チェンバーズが王立キュー植物園に中国要素を導入した後、イギリスの他の植物園や庭園に中国式建築が建てられたり、四季折々で異なる情景が見られる庭園が造られていったことがわかった。さらにそのような中国式庭園の要素が導入されたり、中国式建築が建てられたりした庭園である「イギリス中国風庭園」は、フランスやドイツなどヨーロッパ諸国にも輸出されていたが、中国式建築と風景庭園が混在するというチェンバーズの意に反する形でフランスやドイツなどヨーロッパ諸国に伝わってしまったことが明らかになった。

本章では、中国風庭園が取り入れられた王立キュー植物園の現代イギリス社会における役割や、この植物園の中国要素の導入がイギリスの他の庭園やヨーロッパ諸国にどのように影響を与えたのかについて明らかにした。チェンバーズの取り入れた中国要素は、ブラウンによってわずかなものに減ってしまったものの、王立キュー植物園は植物学的な側面と建築学的な側面からも、帝国主義の歴史など幅広い分野を学ぶことができる場所として現代のイギリス社会において大きな役割を担っている。このイギリスにおける中国式庭園との文化交流の過程でできた「イギリス中国風庭園」は、王立キュー植物園以外にも他のイギリス国内の庭園や植物園にも見られ、またチェンバーズの意に反する形で流行してしまったものの、フランスやドイツといったヨーロッパ大陸諸国へ輸出されるほどその影響は大きかったと考えられる。

終章

ロンドン南西部にある王立キュー植物園は、ユネスコ世界文化遺産にも登録されているイギリス国内最大級の植物園である。この植物園は世界中から集められた膨大な植物資料を保有しており、イギリスの庭園文化を象徴する植物園でもあると言える。イギリスでシノワズリと呼ばれる中国趣味が流行した18世紀後半、イギリス人建築家のウィリアム・チェンバーズはこの植物園の造園を任せられ、多くの中国式庭園要素をこの植物園に導入しようと試みた。現在、王立キュー植物園にチェンバーズの造った庭園や建築はほとんど残されていないものの、中国風のPagodaなどわずかな建築物及び彼の著書からは当時の面影を読み取ることができる。このような中国式庭園の要素はなぜイギリスの庭園に導入され、また社会にどのような影響を与えたのだろうか。本論文では、建築家ウィリアム・チェンバーズがイギリスの庭園に中国要素を導入しようとした背景や意義について考察した。またイギリス式庭園に中国要素が導入された文化を「イギリス中国風庭園文化」とし、そのイギリス及びヨーロッパ諸国への影響について検証した。

第1章では、イギリスと中国それぞれの庭園文化の特徴や成立過程について整理した。イギリスでは、17世紀にイタリアやフランスといった大陸から整形庭園が伝わったものの、18世紀に古代ローマの風景画やイギリスの自然風景をモチーフにした風景庭園が造られるようになった。この風景庭園は、曲線が多用され、人工ではあるものの自然の風景のような庭園であることが特徴である。一方中国では、庭園は王個人のものとして漢王朝時代（紀元前206-220年）に造られはじめ、成熟期を迎える清時代（1644～1912年）には、江南の風景や神仙思想の世界を再現した庭園が造られるようになった。この中国式庭園の特徴は、古代思想や現存する景勝地をモチーフにし、人工の建築物と自然の調和を重視していることである。さらに、四季折々の情景を庭園内に表現することも重要である。またこの章では、時代背景としてイギリス国内にて流行したシノワズリと呼ばれる中国趣味についても触れた。イギリス人は、宣教師たちによって伝えられた遠く離れた国である中国の文化に対し、はじめは「異質なもの」として興味を持つようになっていった。そしてその中国趣味は、室内における家具や内装から屋外の庭園や建築まで幅広く影響を与え、庭園に関しては多くの建築家はその不規則性を重視した中国の庭園に興味を示した。

第2章では、王立キュー植物園の成立過程及びウィリアム・チェンバーズの生涯、彼と中国との関わりについて整理した後、チェンバーズの著書である *A Dissertation on Oriental Gardening* (1772) を用いて、彼がどのような中国の庭園要素に魅力を感じ、王立キュー植物園の庭園に導入したのかについて考察した。王立キュー植物園は、長い歴史の中でプラントハンターと呼ばれる人たちによって世界中から集められた多くの植物を栽培し、研究をしているという植物学的な側面を持ち、植物学的な側面においても東洋との繋がりを持つ植物園であることがわかった。ウィリアム・チェンバーズは、スウェーデンの商人の家に生まれたものの、中国・広東での滞在を通して中国の建築や造園に興味を示すようになっていった。*A Dissertation on Oriental Gardening* をはじめとする彼の著書からは、「自然性と

人工性の調和」、及び「四季」による場面分けという二点が中国式庭園の魅力であるという立場をとっていたと読み取れ、彼がイタリアやフランスから伝わった整形庭園と当時イギリス国内で流行し始めた風景庭園に対して批判的に捉えていたことが分かった。さらにこの中国式庭園要素導入に関して、チェンバーズはブラウンへの批判のため、イギリスの帝国としての強さを対外的にアピールするため、当時流行していた中国趣味を批判するため、という3つの意図があったと推察された。

第3章では、中国要素が導入された王立キュー植物園の現代社会における役割、及び中国式庭園要素が導入された庭園のイギリス他の庭園やヨーロッパ諸国への影響について考察した。ブラウンによってチェンバーズの取り入れた中国式庭園要素はわずかなものに減ってしまったが、王立キュー植物園は植物学的な側面と建築学的な側面の双方から帝国主義の歴史など幅広い分野を学ぶことができる場所として、現代のイギリス社会において大きな役割を担っている。このような中国式庭園要素が導入された庭園はイギリス国内にいくつ也存在し、チェンバーズの意に反する形ではあったものの、フランスやドイツといった他のヨーロッパ大陸諸国の庭園にも影響を与えたことが明らかになった。

本論文では、18世紀のイギリス人建築家ウィリアム・チェンバーズが王立キュー植物園にどのような中国式庭園の要素を導入し、それにはどのような意図があったのかについて考察した。そして当時の中国趣味によって、相違点が多いイギリスと中国の庭園における文化交流が起き、特徴的な庭園文化ができあがったことを明らかにした。結論としては、ウィリアム・チェンバーズによってイギリスと中国の庭園文化交流が王立キュー植物園で起き、それはイギリスの他の庭園及びヨーロッパ諸国へも影響を及ぼしたことが言える。チェンバーズは、自身の中国での滞在にて中国式建築や造園に魅力を感じ、中国趣味が流行していたイギリスの王立キュー植物園に「自然性と人工性の調和」と「四季」を意識した上で、四季による風景の場面分けやそれらの自然風景と中国式建築物を調和させるという中国式庭園の要素を導入したということが言える。中国人の自然観や季節感という点では、中国式庭園の特徴を完璧に導入することはできなかったが、当時の見かけ上の、またヨーロッパ化した中国趣味に批判するためなどの意図があり、当時の中国趣味とは一線を画すものであったことが推察された。現在の王立キュー植物園には、彼の造ったものは中国風 **Pagoda** や **Ruined Arch**、**Orangery** などごくわずかしか残されていない。しかし、その後の他のイギリスの庭園、フランスやドイツの庭園に中国風の塔や四阿が建築されたように、チェンバーズによる中国式庭園要素の導入はイギリス及びヨーロッパ諸国の庭園文化に大きな影響を与えることになった。

最後に、本論文は、ウィリアム・チェンバーズの中国式庭園要素導入の意図としていくつかの説を提示したこと、及びこの文化交流を「イギリス中国風庭園」としてイギリス発祥の特徴的な庭園文化であると論じたことに意義がある。しかし、本論文はイギリスを中心としたヨーロッパを舞台に東西文化交流について論じているため、ヨーロッパの庭園様

式が中国の庭園に導入された円明園等の中国の庭園の例についても検証することで、双方の東西庭園文化交流を証明することができ、この点が今後の研究課題である。

参考資料一覧



参考資料1 ヴァチカン宮殿の庭園

ヴァチカン博物館公式ホームページより引用



参考資料2 ヴェルサイユ宮殿の庭園

ヴェルサイユ宮殿公式ホームページより引用



参考資料3 ヴェルサイユ宮殿平面図

平岡 (2018) p.444 より引用

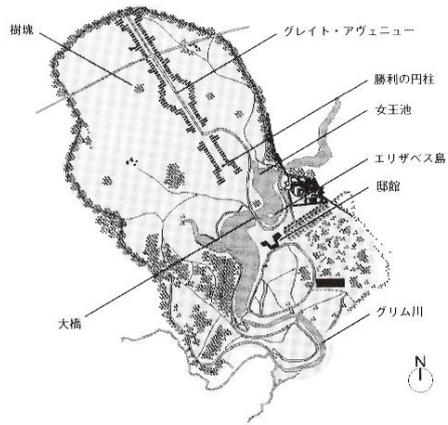


参考資料4 クロード・ロラン ローマ近郊ポンテモールの風景 (1645)

Mayer (2011) p.18 より引用



参考資料 5 ブレナム宮殿の庭園
ブレナム宮殿公式ホームページより引用

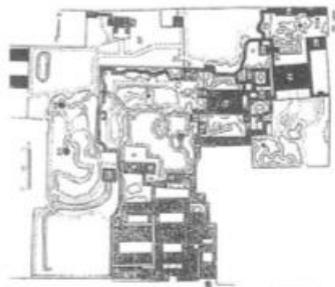


ブレナム・パレス平面図

参考資料 6 ブレナム宮殿 平面図
田路 (2000) p.80 より引用



頤和園

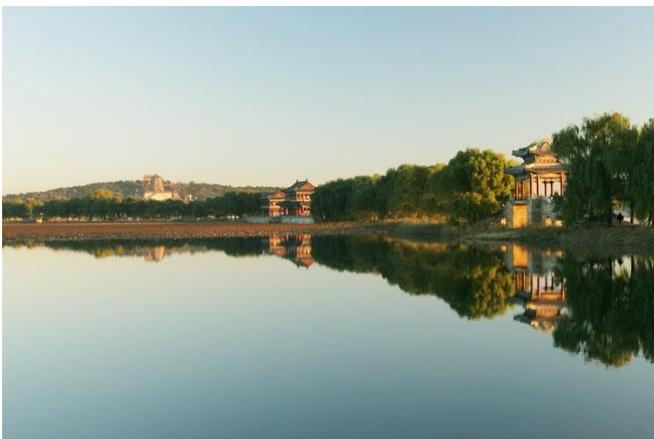


留園



拙政園

参考資料 7 中国式庭園（頤和園・留園・拙政園）の平面図
河原 (2007) p.103 より引用



参考資料 8 頤和園・昆明湖
頤和園公式ホームページより引用



参考資料 9 頤和園・玉帯橋
頤和園公式ホームページより引用



参考資料 10 頤和園・長廊
頤和園公式ホームページより引用



参考資料 11 頤和園 平面図
頤和園公式ホームページより引用



参考資料 12 Palm House
王立キュー植物園公式ホームページより引用



参考資料 13 Rock Garden
王立キュー植物園公式ホームページより引用



参考資料 14 Japanese Garden
王立キュー植物園公式ホームページより引用



参考資料 15 Great Pagoda
王立キュー植物園公式ホームページより引用



参考資料 16 Chinese Building
Chambers (1757) (n.pag.) より引用



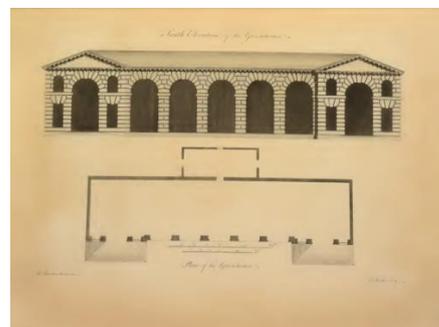
参考資料 17 Chinese building
Chambers (1757) (n.pag.) より引用



参考資料 18 Chinese Utensils
Chambers (1757) (n.pag.) より引用



参考資料 19 Orangery
王立キュー植物園公式ホームページより引用



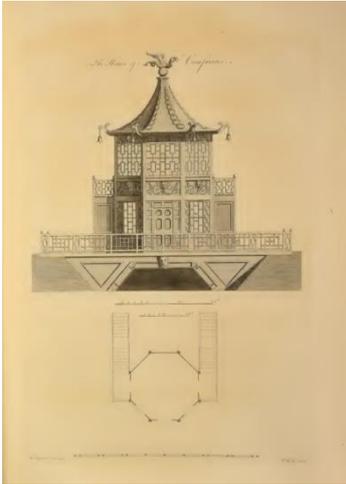
参考資料 20 Orangery
Chambers (1763) (n.pag.) より引用



参考資料 21 Flower Garden and Aviary
Chambers (1763) (n.pag.) より引用



参考資料 22 Menagerie
Chambers (1763) (n.pag.) より引用



参考資料 23 House of Confucius
Chambers (1763) (n.pag.) より引用



参考資料 24 Great Pagoda
Chambers (1763) (n.pag.) より引用



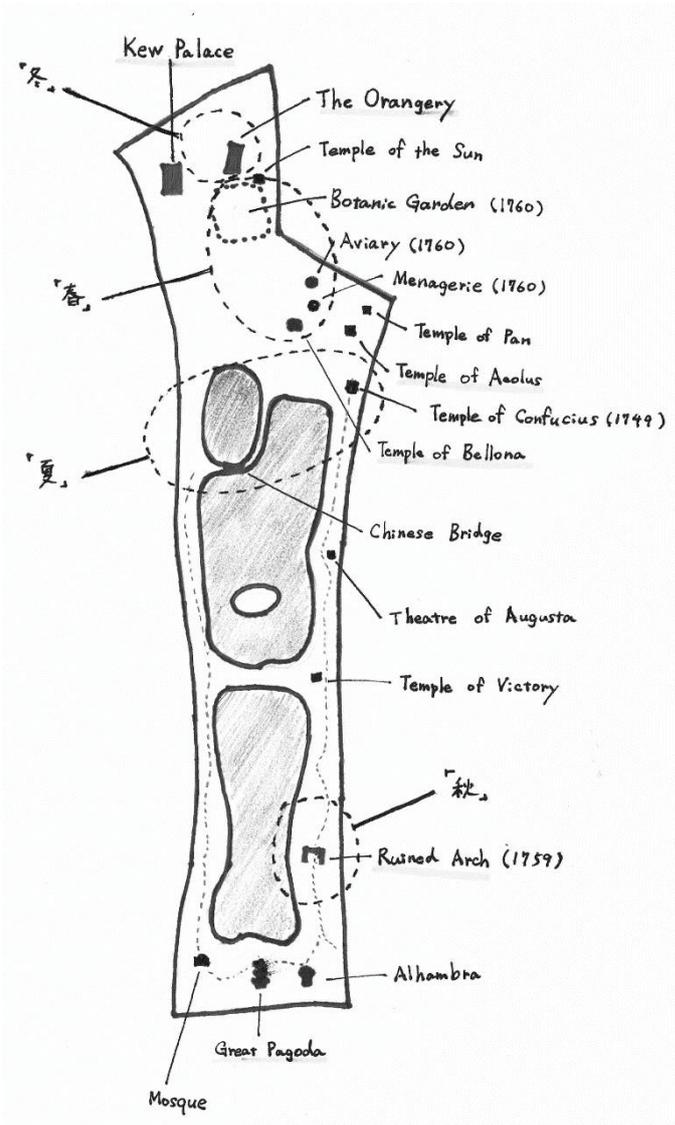
参考資料 25 Great Pagoda and Gardens
Chambers (1763) (n.pag.) より引用



参考資料 26 Sackler Crossing
 王立キュー植物園公式ホームページより引用



参考資料 27 Half Buried Triumphal Arches
 Chambers (1763) (n.pag.) より引用



参考資料 28
 Plans of Kew Gardens
 岡・土井 (1999) p.515 及び
 Chambers (1763), Chambers (1772)
 を基に筆者作成



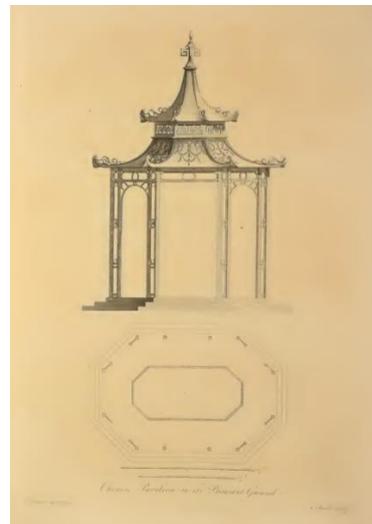
参考資料 29 The Chinese Dairy

ウォバーン・アビー公式ホームページより引用



参考資料 30 Chinese Pagoda at Water Garden

ナショナルトラスト公式ホームページより引用



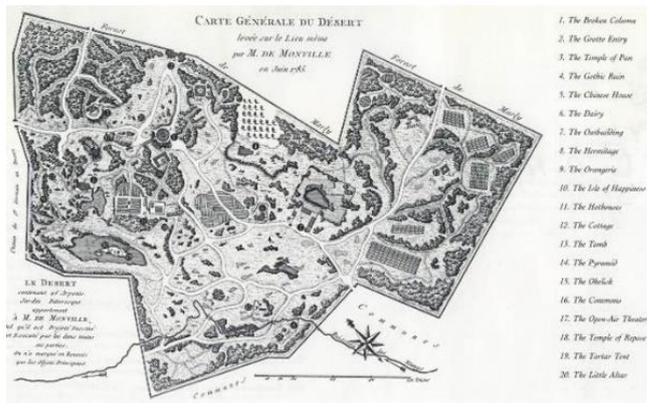
参考資料 31 Menagerie

Chambers (1763) (n.pag.) より引用



参考資料 32 フランソワ・ブーシェ「中国の庭」(1742)

Stein (1996) p.604 より引用



参考資料 33 レの荒野 平面図

White (2017) p.131 より引用

参考文献一覽

- Addison, Joseph. (1712). *The Spectator*. June 25. England. (publisher unknown) No. 414.
- Attiret, Jean Denis. (1752). *A Particular Account of the Emperor of China's Gardens near Peking*. London. (publisher unknown) (original work published 1743)
- Blenheim Palace. (n.d.). Visit Us. Retrieved December 19, 2019, from <https://www.blenheimpalace.com/visitus/>
- Chambers, William. (1757). *Design of Chinese Buildings, Furniture, Dresses, Machines and Utensils*. London. (publisher unknown)
- . (1763). *Plans, Elevations, Sections, and Perspective Views of the Gardens and Buildings at Kew in Surrey the Seat of her Royal Highness the Princess Dowager of Wales*. London: J. HaberKorn.
- . (1772). *A Dissertation on Oriental Gardening*. London. (publisher unknown)
- . (1773). An Explanatory Discourse by Tan Chet-Qua. *A Dissertation on Oriental Gardening*. 2nd ed. London. (publisher unknown) 109-63.
- Chase, Isabel W. (1936). William Mason and Sir William Chambers' Dissertation on Oriental Gardening. *The Journal of English and Germanic Philology*. Vol. 35. No. 4. Illinois: University of Illinois Press. 517-29.
- Château de Versailles Site Official. (n.d.). L'orangerie. Retrieved December 19, 2019, from <http://www.chateauversailles.fr/decouvrir/domaine/jardins/orangerie#le-batiment>
- Ge, Liangyan. (1992). On the Eighteenth-Century English Misreading of the Chinese Garden. *Comparative Civilizations Review*. Vol. 27, No. 27. Brigham: BYU Scholars Archive. 106-26.
- Goldsmith, Oliver. (1820). *Letters from a Citizen of the World*. Burgay: J. and R. Childs. (original work published 1762).
- Liu, Yu. (2008). *Seeds of a Different Eden : Chinese Gardening Ideas and a New English Aesthetic Ideal*. South Caroline: University of South Carolina Press.
- . (2018). The Real vs the Imaginary: Sir William Chambers on the Chinese Garden. *The European Legacy*. London: Routledge. 674-91.
- Mayer, Laura. (2011). *Capability Brown and English Landscape Garden*. Oxford: Shire.
- McVicker, Jeanette. (1992). Vast Nests of Chinese Boxes, or Getting to from Q to R: Critiquing Empire in "Kew Gardens" and "To the lighthouse". *Virginia Woolf Miscellanies*. Ed. Mark Hussey and Vara Neverrow-Turk. New York: Pace University Press. 40-42.
- Musei Vaticani Sito Ufficiale. (n.d.) Ville Pontificie. Retrieved December 18, 2019, from

- www.museivaticani.va/content/museivaticani/it/visita-i-musei/scegli-la-visita/ville-pontificie-e-giardini/ville-pontificie-di-castel-gandolfo.html
- National Trust. (n.d.) The Water Garden at Cliveden. Retrieved December 19, 2019, from <https://www.nationaltrust.org.uk/cliveden/features/the-water-garden-at-cliveden>
- Royal Botanic Gardens, Kew. (n.d.) What's in the Gardens. Retrieved December 19, 2019, from <https://www.kew.org/kew-gardens/whats-in-the-gardens>
- Saguaro, Shelly. (2006). *Garden Plots: The Politics And Poetics of Gardens*. Farnham : Ashgate Publishing Ltd.
- Shimada, Takau. (1997). Is Sharawadgi Derived from the Japanese Word Sorowaji?. *The Review of English Studies*. Oxford: Oxford University Press. Vol. 48. No. 191. 350-52.
- Stein, Perrin. (1996). Boucher's Chinoiserie: Some New Sources. *The Burlington Magazine*. London: Burlington Magazine Publications Ltd. Vol. 138. No. 1122. 598-604.
- White, Janet R. (2017). The Jardin-Anglais as Public Image of the Self. *Civil Engineering and Architecture*. San Jose: Horizon Research Publishing Vol. 5. No. 4. 125-33.
- Woburn Abbey and Gardens. (n.d.) The Chinese Dairy. Retrieved December 19, 2019, from <https://www.woburnabbey.co.uk/gardens/explore/the-chinese-dairy/>
- Woolf, Virginia. (2017). *Kew Gardens*. Surry: Kew Publishing. (original work published 1919)
- 石田美佐江 (2013) 「Virginia Woolf の描く *Kew Gardens*」 *Persica, March 2013* 岡山大学英文学会. No.40. 37-48.
- 颐和园官方网站 (n.d.) 「颐和景观」 <http://www.summerpalace-china.com/yhjg/index.htm>
(最終閲覧日 : 2019 年 12 月 19 日)
- 岩切正介 (2008) 『ヨーロッパの庭園 美の楽園をめぐる旅』中央公論新社.
- 大野英二郎 (2011) 『停滞の中国—近代西洋における中国像の変遷』国書刊行会.
- 岡禎大・土井義岳 (1999) 「ウィリアム・チェンバーズの英国支那式庭園に関する研究『東洋造園術論』とキュー・ガーデンとの関連性」『日本建築学会九州支部研究報告』第 38 号 513-516.
- 片平幸 (2010) 「往還する日本庭園の文化史—ジョサイア・コンドルの日本庭園論の考察を中心に—」『桃山学院大学総合研究所紀要』第 35 号第 2 号 33-54.
- 勝山久里 (2006) 「コールリッジと中国庭園」『イギリスロマン派研究』イギリス・ロマン派学会. 第 29・30 合併号. 27-38.
- 加藤弘嗣 (2014) 「ウィリアム・チェンバーズの庭園論 : 中国と理想の庭」『日本ジョンソン協会年報』第 38 号. 5-9.
- (2015) 「ウィリアム・チェンバーズの庭園論再考—英国庭園風景の反証としての

- 中国の庭—」『英米文学』関西学院大学. 59 卷 1 号 255-70.
- 門田園子 (2015) 「トマス・チッペンデル『紳士と家具職人のための指導書』のシノワズリに関する一考察」『デザイン理論』大阪大学. 第 65 卷 45-58.
- 川島昭夫 (1999) 『植物と市民の歴史』山川出版社.
- 河原武敏 (2007) 「中国における庭園建築の特色」『日本庭園学会誌』 第 17 号 103-10.
—— (2007) 「中国における庭園植栽の特色」『日本庭園学会誌』 第 18 号 71-8.
- 日下隆平 (2018) 「イギリスの中世主義：ウォルポールとモリスの間にあるもの」『人間文化研究』 桃山学院大学. 第 8 卷. 73-100.
- コロナブックス編集部 (2019) 『英国キュー王立植物園』平凡社.
- 祝丹・神藤正人・蓑茂寿太郎 (2006) 「北京・頤和園の景観構成に見られる江南景観の影響」『東京農大農学集報』 51 (1) . 27-36.
- ズイレン ガヴリエーレ ヴァン (1999) 『ヨーロッパ庭園物語』小林章夫監修. 創元社.
- 鈴木裕子 (2014) 「イギリス化する「中国風」：名誉革命から 18 世紀半ばのイギリス家具に見るシノワズリ」『年報地域文化研究』 東京大学. 第 17 卷. 41-67.
- 仙田満・高木真人・小川一人 (2001) 「中国園林における廊的空間に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』 第 542 号. 261-67.
- 田路貴浩 (2000) 『イギリス風景庭園 水と緑と空の造形』丸善株式会社.
- 中尾真理 (1999) 『英国式庭園—自然は直線を好まない』講談社.
- 野間晴雄 (2009) 「東洋の植物を求めて—植物園・プラントハンター・園芸家の文化交渉学」『東アジア文化交渉研究 別冊』 関西大学文化交渉学教育研究拠点. 第 4 卷. 109-35.
—— (2009) 「海外からの植物移送・保存技術に関わる資料（翻刻）—大英帝国プラントハンターの元締め J. バンクスによる手引き書」『関西大学東西学術研究所紀要』 第 42 輯. 51-60.
—— (2014) 「王立キュー植物園の設立と拡大（前編）：大英帝国ネットワークの一翼」『関西大学東西学術研究所紀要』 第 47 輯. 133-66.
- 平岡直樹 (2018) 「ヴェルサイユ宮殿の立体構成と平面構成及び構成物による視覚効果の創出技術」『ランドスケープ研究』 日本造園学会. 81 卷 5 号. 443-48.
- 马锦义・武涛 (2003) 「中国传统造园植物造景艺术特征与手法」『南京农业大学学报（社会科学版）』 南京农业大学园艺学院. 第 3 卷 99-104.